

平安時代漆芸技法資料 XI

——中尊寺螺鈿沃懸地堂内具——

中 里 寿 克

1. はじめに

中尊寺には大長寿院、地藏院、金色院に所属する螺鈿沃懸地の堂内具が多数遺されており、それらのほとんどは現存する経蔵や金色堂の什器とされる。それらを指定目録に従って抄出すると次の通りである。

大長寿院

螺鈿八角須弥壇

中尊寺経蔵堂内具

木造礼盤

螺鈿平塵案

磬架 附孔雀文磬

螺鈿平塵燈台

地藏院

蓮華唐草文蒔絵大壇

金色院

中尊寺金色堂堂内具

木造礼盤

螺鈿平塵案

螺鈿平塵案

螺鈿平塵案

磬架 附孔雀文磬

の計11点である。

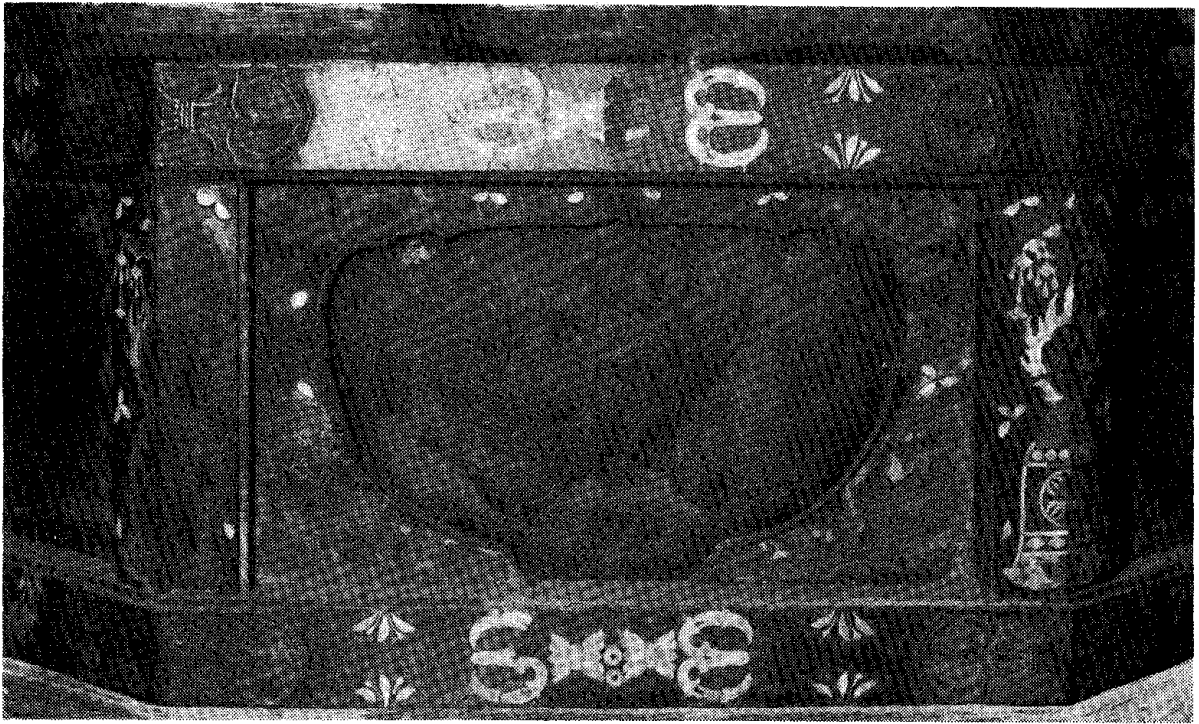
これらの内には甚しい破損によって沃懸地螺鈿の痕跡のみの物もあるが、いずれもが現存の金色堂や往時の経蔵に相応しい蒔絵や沃懸地螺鈿で装飾されている。

ここでは修理に伴う技法調査でほぼその漆芸技法が解明している金色堂を基準として、これらの技法がどのようなものであるかを述べてみたい¹⁾。

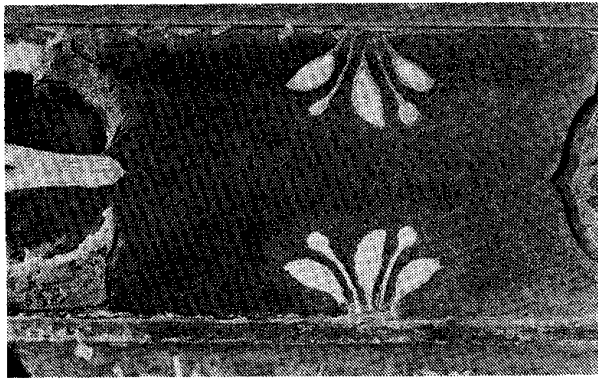
2. 中尊寺堂内具の技法

螺鈿八角須弥壇 (図-1)

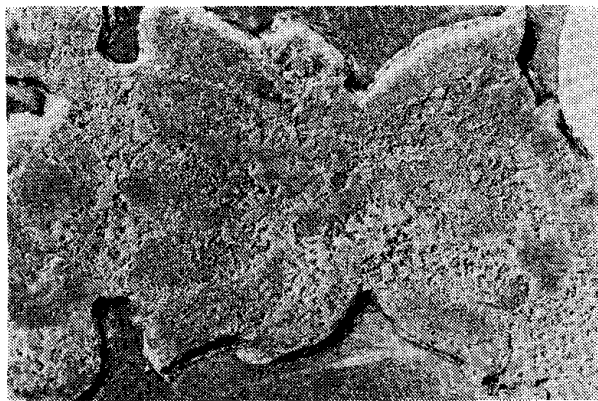
平面は正八角形で、側面では上下に太い框を据え、それを八角の隅で束で支える。束内には



図一 螺鈿八角須弥壇（大長寿院）



図二 螺鈿八角須弥壇細部



図三 螺鈿八角須弥壇の麦漆

香様を設け、白銅鏡板に打出しの迦陵頻伽を飾る。鏡面を除く側面全面は沃懸地螺鈿で装飾する。天板は現在は後補で素地のままである²⁾。

(i) 螺鈿技法

螺鈿嵌装法はダイタイ彫りによるが、金色堂漆芸部材に見られるものとは若干彫痕を異にする様である。実際には框面や束面のダイタイ彫りは正確に把握できないのだが、框面の沃懸地面に現われる微妙な色の变化を辿れば、普通見られる小判の形でなく螺鈿形に近い形を彫込んでいるらしい。框面の三鈎杵文は8形に限があり、その形は三鈎杵の概形にほぼ見合う。杵の左右に配した上下で向合う花葉文は、万頭形のダイタイ彫りに嵌装される(図一2)。束の宝蓋を載いた宝珠鈴の螺鈿文は、螺鈿が束の全面に及んでいる所からダイタイ彫りは行っていないようにも見える。香様周辺の嵌板には螺鈿で上に瑞鳥文、下に孔雀文を嵌装するが、ここでも文様の概形に不定形

に彫込んでいるのが特徴である。

螺鈿の貼付けには麦漆を用いる状態が多くのダイタイ彫り内に確認出来るが、これらにはその状態を異にするものがあり、金色堂においても認められた木屎麦漆のようなものが一部に露

出する。一般には漆分の強い黒褐色、又茶褐色のややキメの粗い麦漆が、ダイタイ彫り内に残存している(図-3)。孔雀文を貼付けた嵌板の麦漆は、粘度が低い状態を示し、螺鈿のおさえ不足による浮上りで麦漆に空泡が多く入っている。螺鈿の剝落は諸条件によって生じるのであろうが、この須弥壇の螺鈿もまさにアトランダムに剝落しており、その内でも香様の孔雀文の螺鈿の剝落が顕著である。

螺鈿のダイタイ彫りによる嵌装の場合は、まずダイタイ彫り内を粗い漆地粉で埋めるのが金色堂部材の工法だが、須弥壇においては黒色漆地粉が用いられる(図-4)。黒色漆地粉は須弥壇の各所で露出しており、全面的に使用された。ダイタイ彫り以外の部分はいわゆる中尊寺地粉と思われる淡黄色の漆地粉が素地上にごく薄く塗付され、それはダイタイ彫り内の黒色漆地粉上にも及んでいる。

(ii) 螺鈿の技法

須弥壇の螺鈿文は、三鈿杵は約 23.8 cm×8.0 cm、宝珠鈴は 29.0 cm×14.0 cm でかなり大きなものだが、螺鈿が巧みに組合されているため、一つ一つはそれほど大きくない。例えば三鈿杵では長いのは42ミリ、面積でみても34×25ミリほどしかない。宝珠鈴でも長いのは幅3ミリ、長さ55ミリが最大で、平安時代の螺鈿からみれば普通である。金色堂の螺鈿も、基本的には組合せで文様を構成しているのだが、須弥壇の場合は組合せの工法を、効果を意図した表現手段として利用しているように感じられる。孔雀文の尾や蓮台の蓮弁の重なり等は、貝の大きさを決められたのではなく、小さな貝をいかに巧妙に組合せるかに腐心した結果であって、明らかにより立体的な効果を意図した所が感じられる。金色堂の螺鈿の組合せには、所々に組合せのづれが指摘出来たが、須弥壇ではそのような破綻がほとんどなく、非常に正確にまとめられているのも留意される。

このように須弥壇の螺鈿法がより技巧的な表現を意図した発想や、それに見合う精緻な技術の高揚は金色堂螺鈿技法と大きな距りがあると感じざるを得ない。

螺鈿切断技術はこの時代に見られる一般的な技法からはみ出る事はなく、円形の断面を持つ糸ノコギリ形の工具で切断したものである。その表現において特筆すべきは孔雀文の尾の輪



図-4 八角須弥壇香様の黒色漆地粉

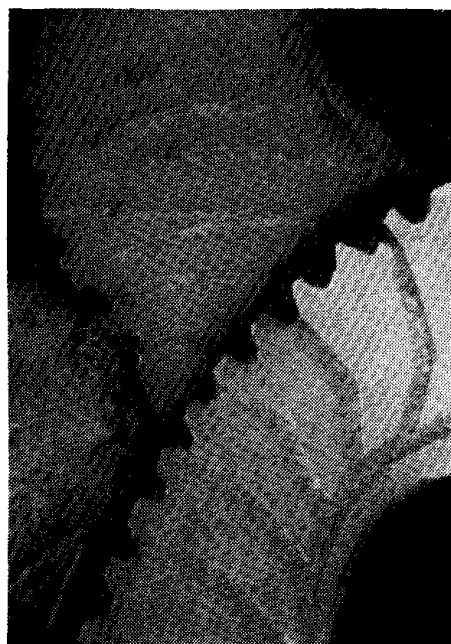


図-5 八角須弥壇香様孔雀文の螺鈿細部

郭である(図-5)。ノコギリ形に小さな刻目を入れた意匠は、現存する当代の螺鈿文形では、あまり見る事のできない形で、同じく中尊寺金色堂の副葬品として見出された螺鈿目貫金具が知られるにすぎない。十二世紀に螺鈿でこのような意匠が行なわれた事はこれらで実証出来る。

(iii) 沃懸地の技法

上下の、框束、香様の表面はすべて沃懸地螺鈿を施こし、香様に接する側面は淡い平塵とする。

沃懸地は場所によって濃淡の差がはげしく大雑把に言えば框では淡く、立束では濃いのだが、この事は多分これらの部材は分解されて沃懸地が施こされたため、同じような調子に統一しにくかったものと思われる。

沃懸地で変則施工が認められる所は、正面から時計廻りの二つ目の側面(南正面)の上框で、

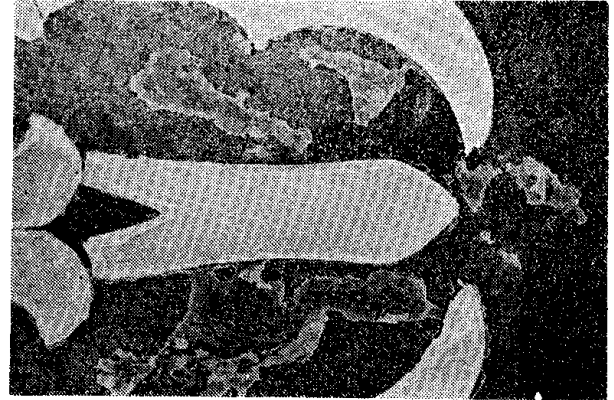
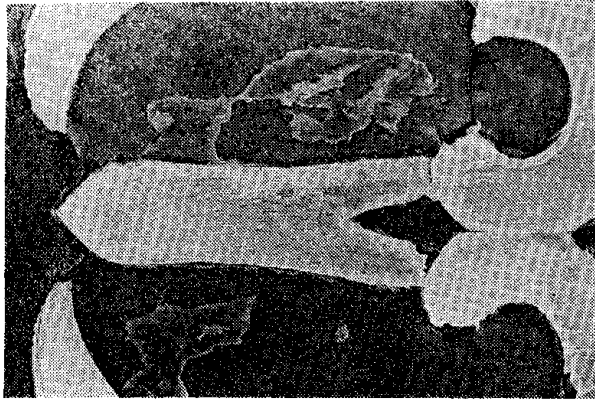


図-6 八角須弥壇上框にみられる二重沃懸地部

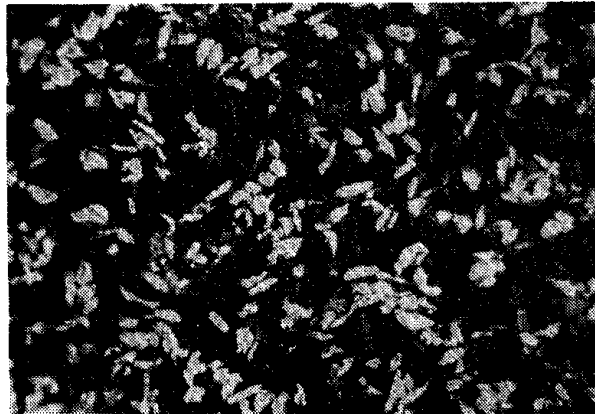


図-7 八角須弥壇束の金粉



図-8 同左 上框の金粉

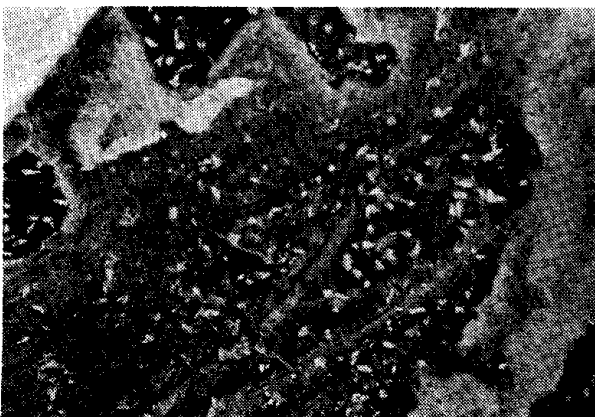
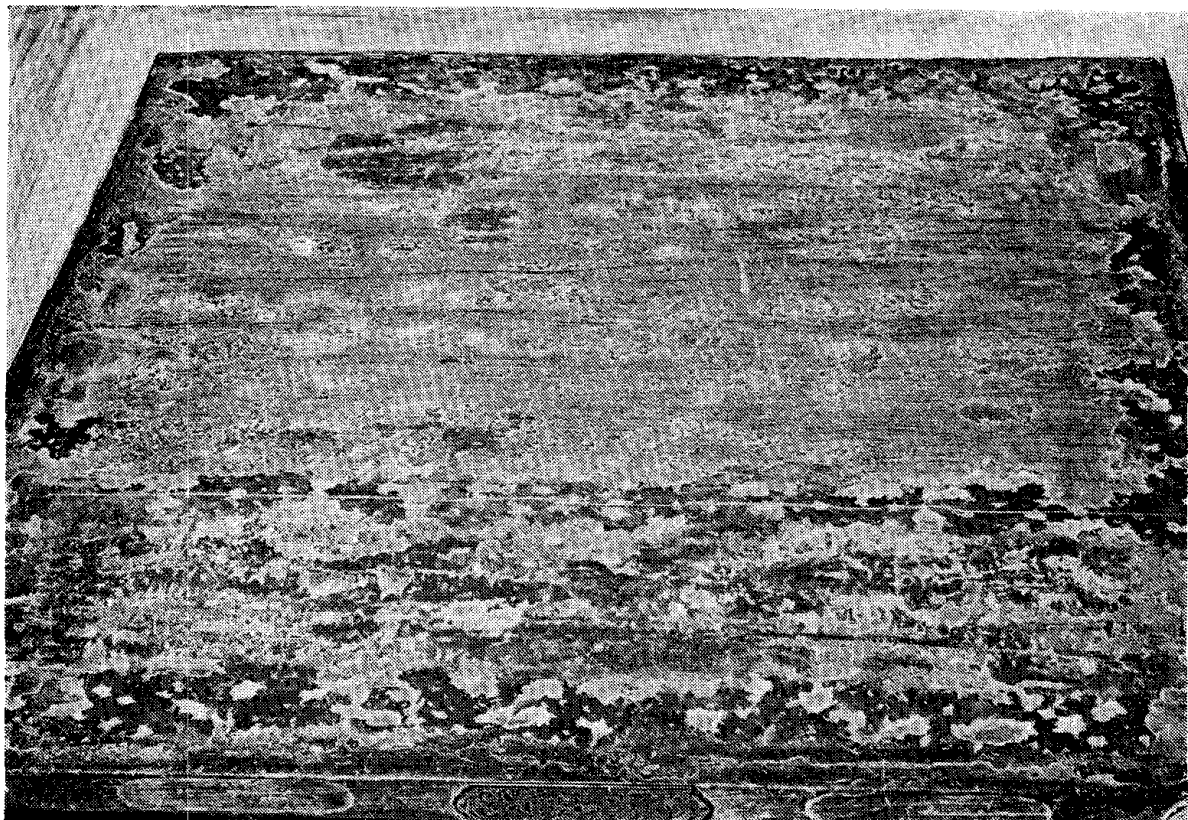


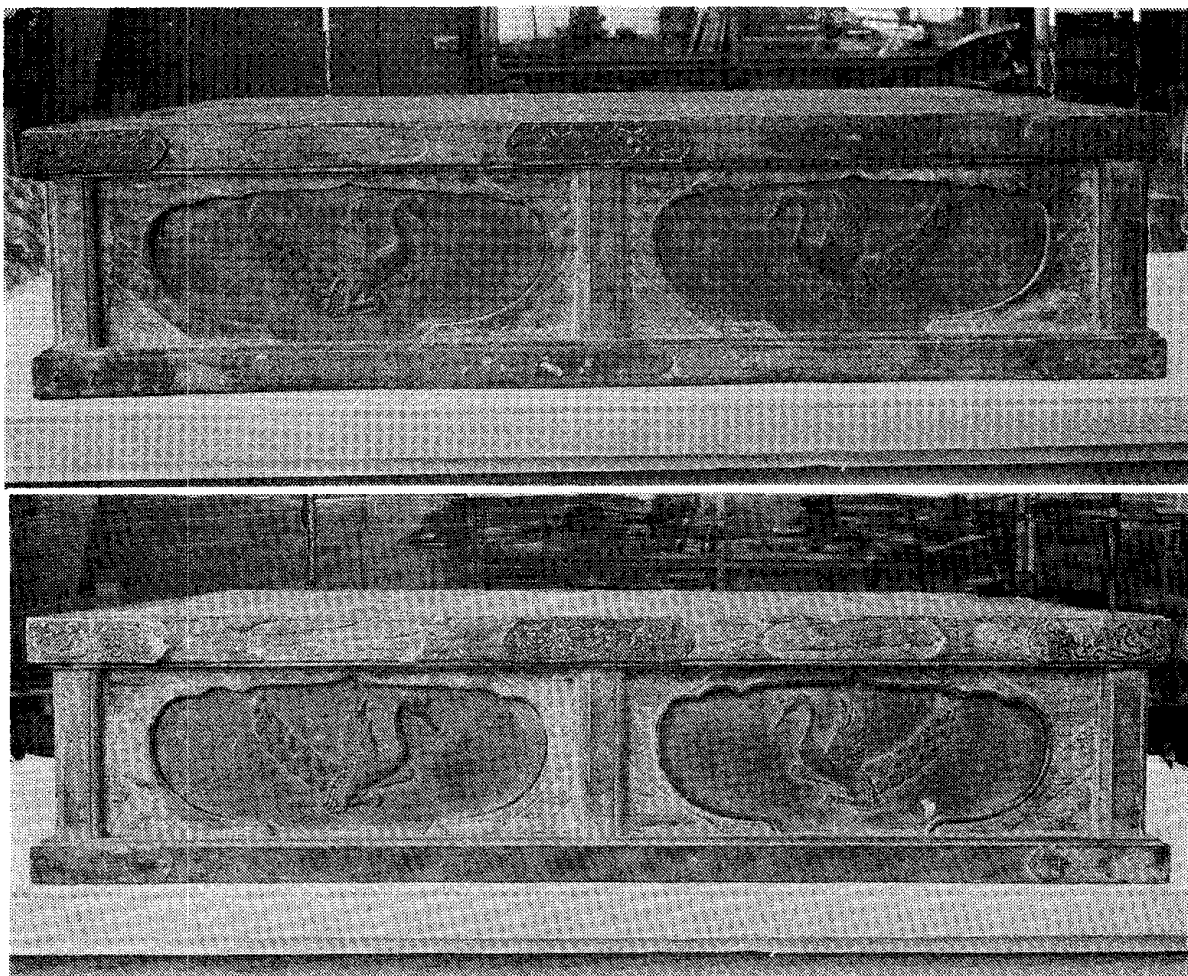
図-9 同上 下層平塵地粉

三鈷杵螺鈿文内には沃懸地が二重に認められる。下層は淡い平塵で、そのすぐ上層に表面の沃懸地層がある。この平塵地は螺鈿文から1cm ほぼ広がった所まで認められており、それ以上には及んでいない(図-6)。

沃懸地粉は細長粉が目立ち、粉形も不規則で鋭角的な所が多いが、比較的揃っている(図-7, 8)。二重沃懸地の下層の粉形は蒔き方は更に淡い(図-9)。現状では極めて不鮮明ではっきりしないが、表面の



図一 10 木造礼盤甲面（大長寿院）



図一 11 木造礼盤側面（大長寿院）

沃懸地よりやや粗目で、やはり細長粉が多い感じがする。

この須弥壇は金色堂に続いて大治三年頃経蔵建立に際し製作されたとする説があるが、黒色漆地粉が施こされる事、螺鈿の技法が金色堂より一段と精緻となり技巧を凝す所が認められることから、更に降って考える必要があるように思える。

螺鈿平塵礼盤 (図-10, 11)

主要部は当初の部材だが、束はすべて新補材で、下框も左右側の二本が新補である (図-12)。

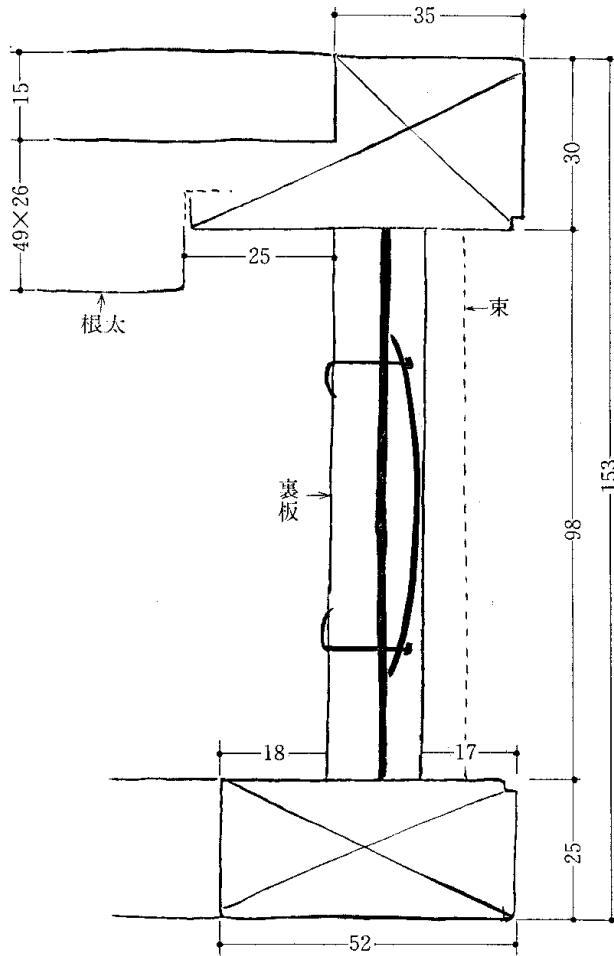


図-12 木造礼盤構造図 (単位ミリ 以下同)

天板は二枚矧ぎだが 50 cm もある広い一枚板に狭い板を継いでいる。表面では漆地が剝離し、そこにヤリかんなの跡が見える。

ダイタイ彫りは上下框と香様膜板にあり、前者では中央に各一個づつ彫る。それらは小刀のようなもので削られたらしく、いずれも浅く彫込まれる。香様膜板のダイタイ彫りはかなり不定型である。螺鈿はまったく遺存せず、麦漆さえも剝落して見当たらないが、香様膜板の一部に黒色漆地粉が僅かに付着し、ダイタイ彫り内はこれによって充填された事が知られる。

玉装の痕跡は上下框のダイタイ彫り内に三つ組で、香様膜板では一個づつ認められる。

沃懸地はダイタイ彫り以外の部分に島状に残存する。漆地粉は淡茶色の粗いもので、一ミリほどにやや厚目に塗布される所が多い (図-13)。八双金具の部分は黒漆地のみとし、框の上下面も黒漆地にとどめる。天板表面も同様である。

沃懸地は粉が細く金地のような状態を示す。拡大してみると、細粉の内に粗粉が混り合うもので、粗粉は円形、米粒形が目立ち、細粉の一部は漆膜下に沈む (図-14, 15)。

金具は上框の八双金具はすべて当初のものだが、下框のはいずれも新補である。

香様には覆輪をめぐらし、銅板鏡地の中央には打出しの孔雀を一羽づつ配す。尾羽根には緑色や透明の小玉を嵌す。鏡地は杉と思われるの薄板に添わせ、孔雀文は七本の銅釘で

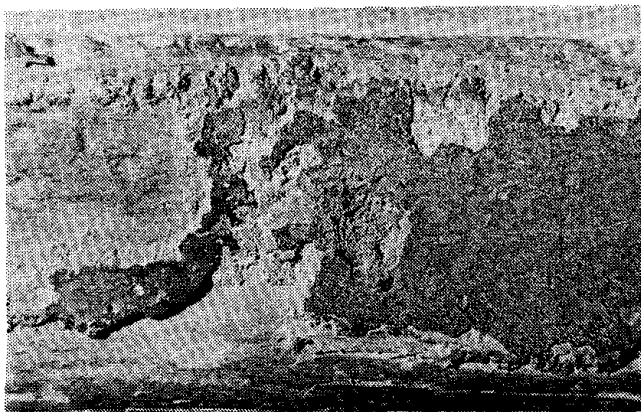


図-13 木造礼盤

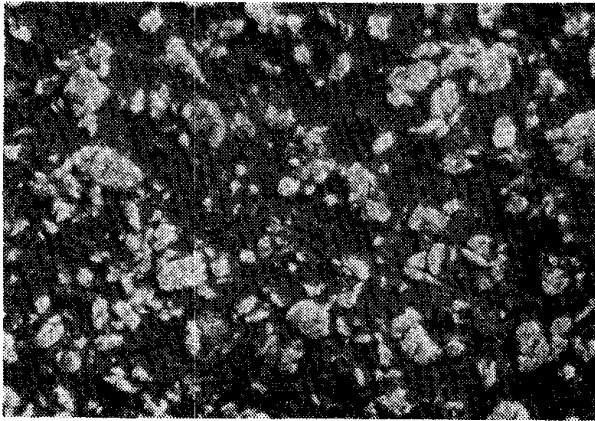


図-14 木造礼盤香様の金粉

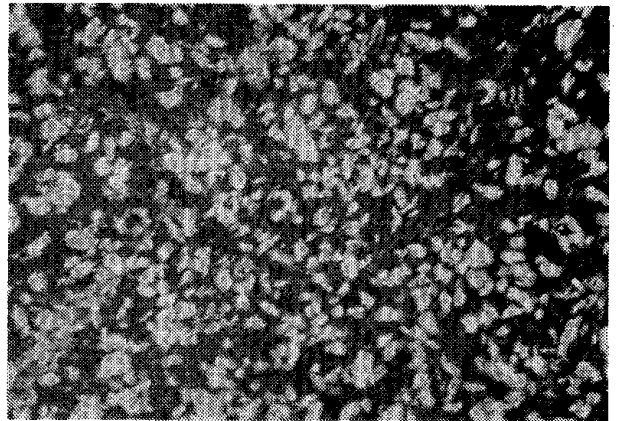


図-15 同左 框の金粉



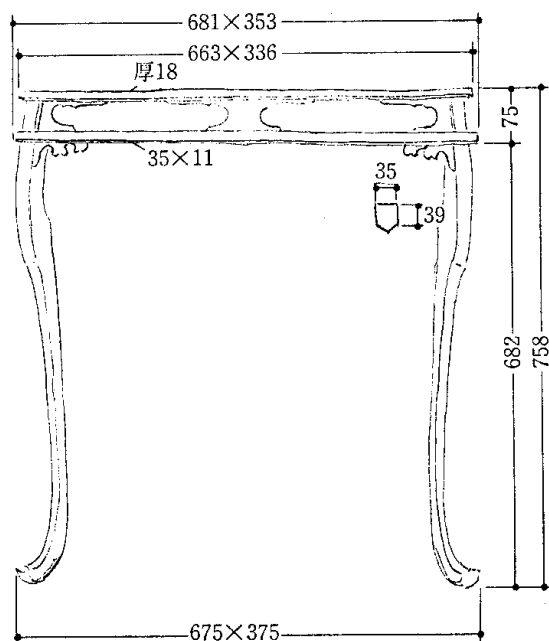
図-16 螺鈿平塵案（大長寿院）

留められ、杉板まで通して折曲げられる。

螺鈿平塵案（図-16）

天板側面，香様膜板，框，脚等の表面はすべて沃懸地螺鈿とする。天板の表面と裏面，框表面は塗漆のみだが，天板には一部に板の矧目があり，その両側には幅26ミリほどの端喰をつけるらしい（図-17）。裏面では矧目にのみ布着せが見えるが後補であろう。

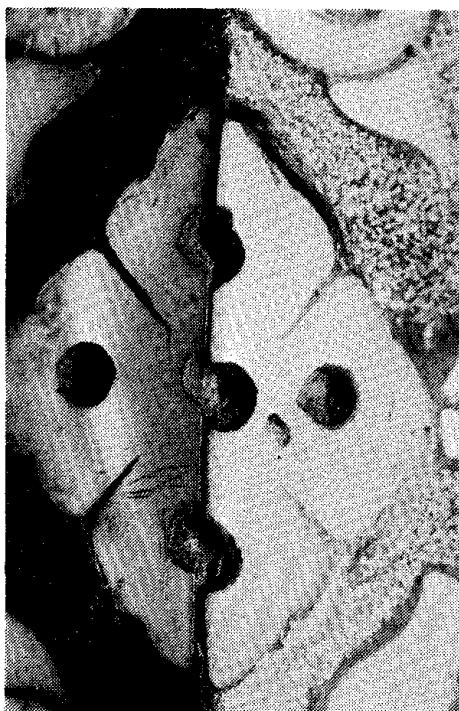
沃懸地，螺鈿の残存は多いとはいえないが，脚の一本には螺鈿がほぼ旧状の状態に残り，当



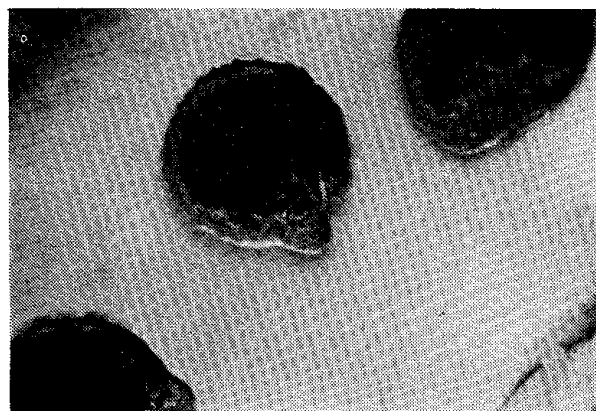
図一七 螺鈿平塵案実測図



図一八 螺鈿平塵案細部



図一九 同左 螺鈿細部



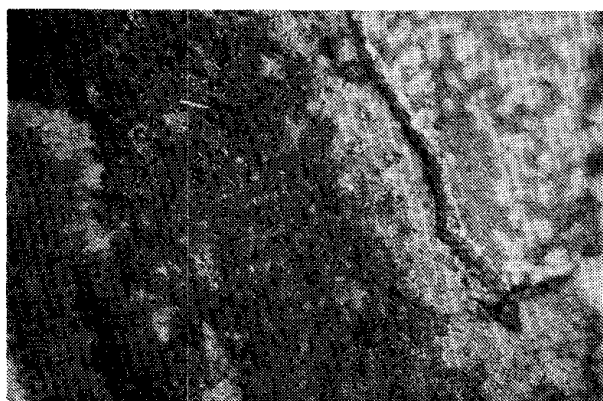
図二〇 上同 螺鈿拡大図

螺鈿部が大部分を占め、四本の脚にのみ過大の装飾を施こした事が感じられる。ダイタイ彫りは執拗に彫込まれ、ほとんどその機能を必要としないほど接近している。ダイタイ彫りが技法として定着し、更に形式化している好例であろう。ただ螺鈿文の構成は、燈台等のものに比すれば端正で、金色堂の長押等の螺鈿文のそれに匹敵する力を有しているといえる。

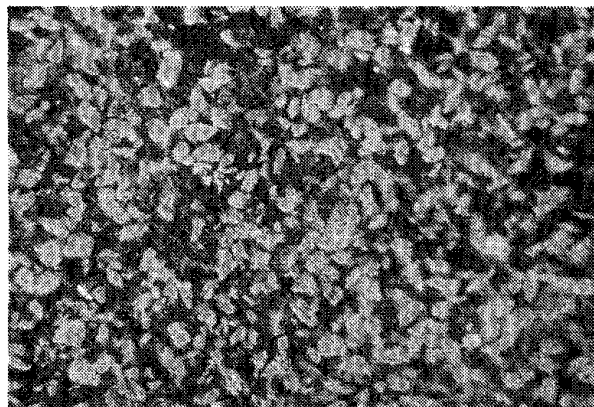
ここに残存する螺鈿で技巧的といえる所は脚の稜部にまたがる螺鈿の処理であって、稜上で切り、その断面は斜に削って突合せている(図一十九)。花芯には玉が埋込まれていたが、脚では伏彩色の朱色が遺存する所が二三認められるだけで玉の残存はない(図一二十)。

初の姿はこれで伺える(図一八)。

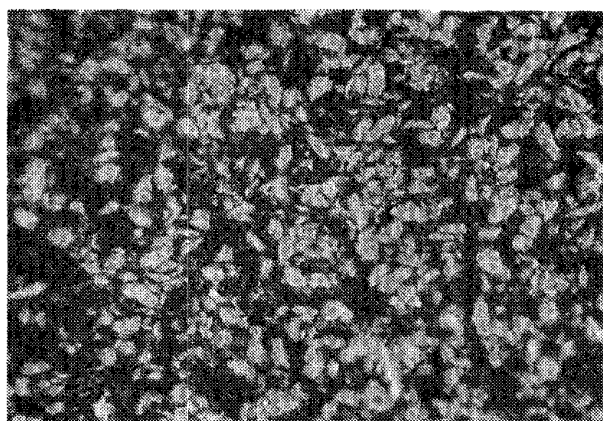
螺鈿嵌装はダイタイ彫りによって行なわれる事は、その多くが露出することで明らかだが、ダイタイ彫り内には麦漆などはほとんど残存せず、まったく素地が露出の状態になっている。残存螺鈿文及ダイタイ彫りから推せば、脚は沃懸地の面積に比して



図一21 螺鈿部黒色漆地粉



図一22 螺鈿案框の金粉



図一23 同左脚の金粉

ダイタイ彫り間の螺鈿間は黒色漆地粉で埋めている事が認められ、ダイタイ彫り外にはみ出る事はない(図一21)。この部分も含め、上に全体に薄く淡茶色の漆地粉が塗付されている。この黒色漆地粉は炭粉の塊の様で、光沢なく、多孔質の物質である。材質的に見てそれほど結集力はなく、断文もあまり生じていない。

螺鈿貼付用の麦漆は、木屎麦漆状のものと表面に漆膜をつくる薄手で固いものが脚の螺鈿部に認められる。しかしいずれも

螺鈿の残存からみて、それらの効能は不完全なものである。

沃懸地は全体に濃く蒔かれるが、脚の裏面等はやや淡い。

粉は米粉形が目立ち、その内に細長粉が散見出来る。大小の粉が混在し雑然としているが、典型的な十二世紀の蒔絵粉と考えてよい(図一22~23)。

螺鈿平塵磬架(図一24, 25, 26, 27)

当初は螺鈿沃懸地で飾られたが、今は螺鈿はまったく遺存せず、ダイタイ彫りのみを認め、沃懸地も脚の一部や山型架木の一部に僅かに付着するのみである。

約 30 cm はなれて据えられる刳形脚は、上面に二段のくびれをつくり、先端はかるく翻って筆返し型におさまる。底面は表面と対応して二段にくびれをつくる。脚先端の木割れ部分に木屎彫りがあるが当初のものかどうかは不明(図一28)。この両脚を連結する貫材は脚にたぶん相欠きで組込まれ、脚の裏から現在は丸釘が二本打こまれて固定される。X線透視によれば、当初は上面から打込まれた角釘の痕跡がある。

脚と貫の交差個所には各支柱が立てられ、上端は山形架木で繋ぐが、交差個所では脚底面まで支柱が貫通する。底面での痕跡によれば差込まれた部分は円く削っているらしい。底面には又支柱を中心に据えるために工作したひっかきによる対角線が認められ、墨線にかわる施工用のこの様なひっかきは所々に行なわれる(図一29)。両側の支柱は必ずしも垂直でなく、上部で7ミリほど広がる。

支柱と山形架木の接合方法ははっきり確認できないが、X線透視によれば柄はなく、今は丸釘が打たれる(図一30)。しかし当初と思われる釘も支柱先端に残存しており、あるいは当初

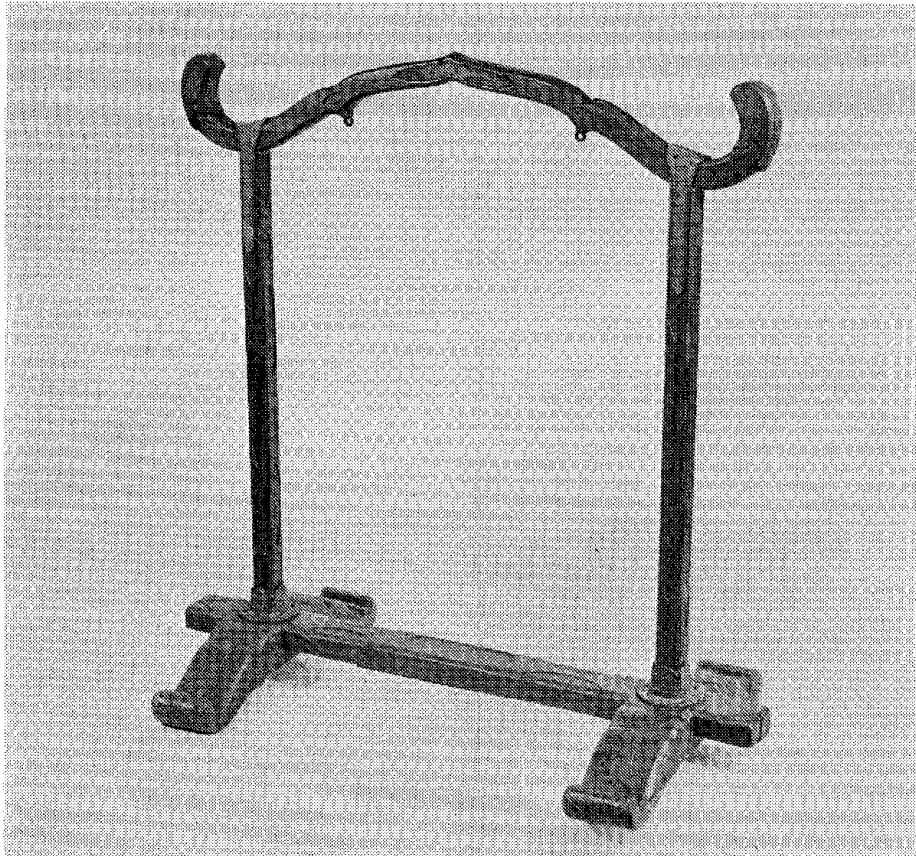


図-24 磐架 (大長寿院)

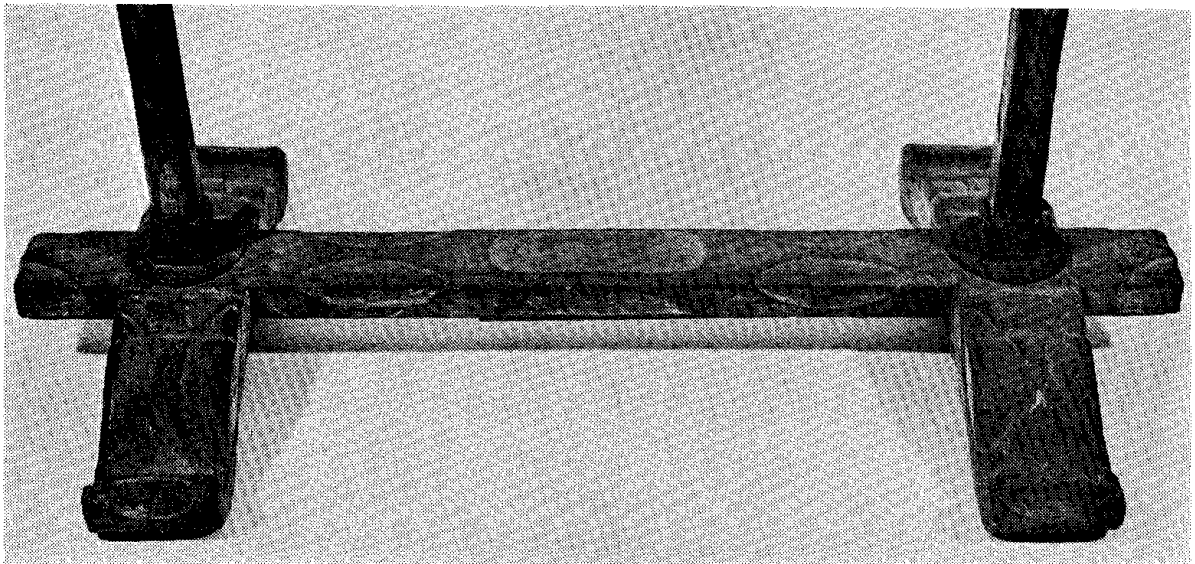
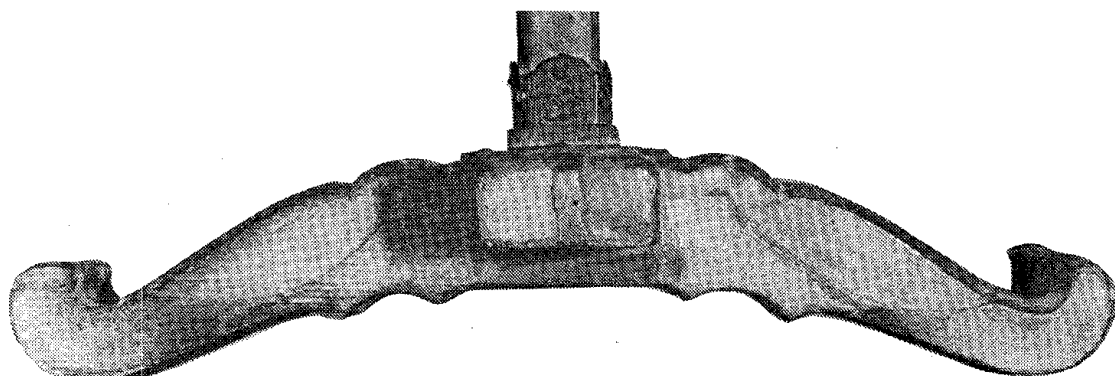


図-25 磐架脚部 (同上)

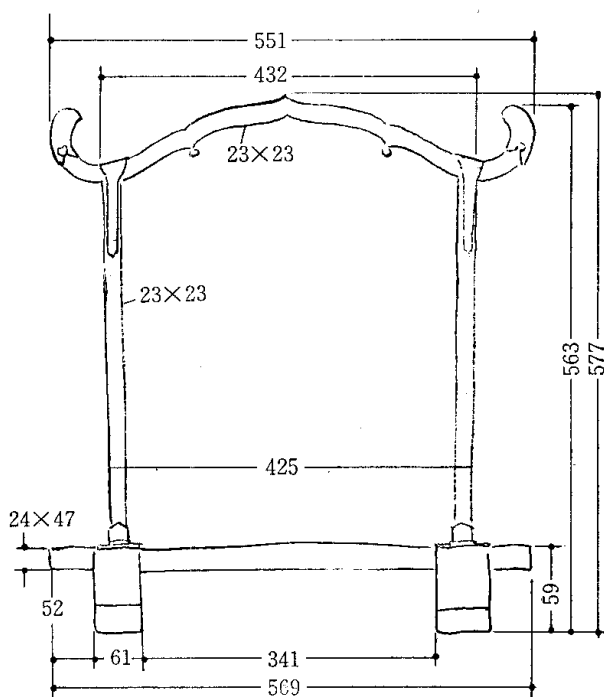
から単に釘で固定しただけであったかもしれない。

山形架木は一木から削出しており、両端の蕨手の部分は構造的に不安定だが、かつて折損した疑いはない。

山形架木下面、貫下面、脚底面を除いて総てにダイタイ彫りが残るが、深さは1ミリほどで浅く、麦漆もまったく残存しない。ただ玉嵌入のための痕跡はダイタイ彫り内に印され、脚では三つ組、支柱では一つづつ、貫中央には両面とも五つ組の痕跡がある。山形架木上面には認



図一26 架脚髻側面



図一27 髻架（大長寿院）実測図



図一28 髻架 脚の木尻彫り

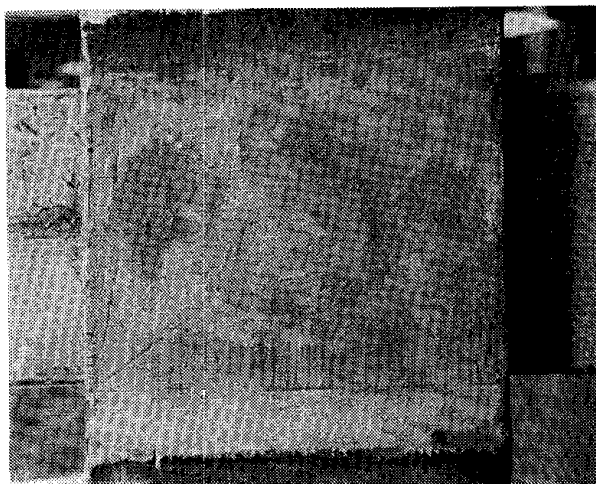
められない。又山形架木，支柱のダイタイ彫りのほとんどには平行斜線が入る。（この斜線は前記の平塵案のダイタイ彫りの一部にも見えた）

沃懸地の残存はダイタイ彫り外にかぎられ，脚の一部，支柱のごく一部，山形架木の端装金具附近にのみ見られる。貫及脚では濃い目に蒔かれるが，支柱・山形架木では淡い。

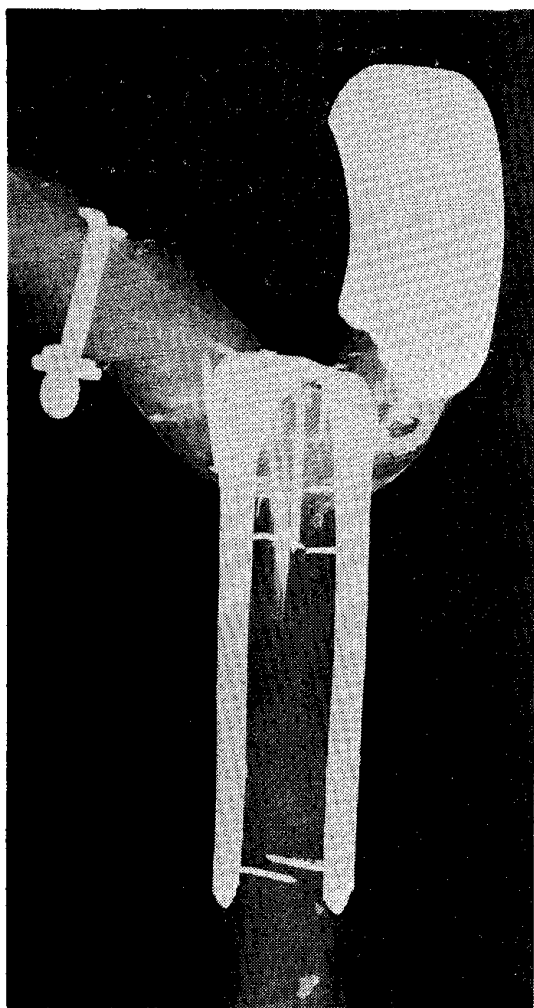
下地はごく薄く，素地上に直接塗布される。

沃懸地粉は米粒形細長形が多く，円形粉はそれほど目立たない。粒子は大小が混在し，やや雑然としている（図一31）。

金具は支柱根元に座金（一個新補）を置き，根巻金具とささら金をはめる。蕨手の先端にも猪目を持つ金具をはめ，山形架木と支柱の接合部にもコの字形の金具をかぶ



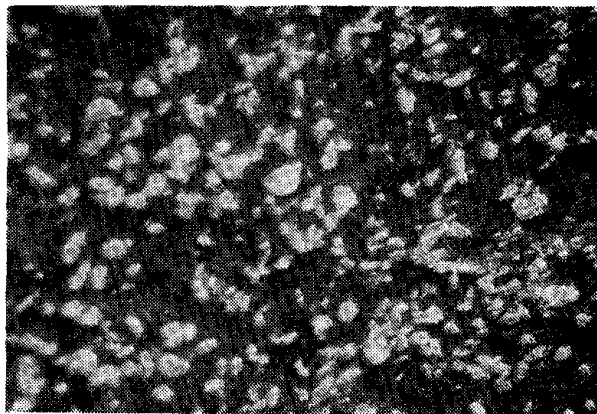
図一29 髻架 脚底面の状態



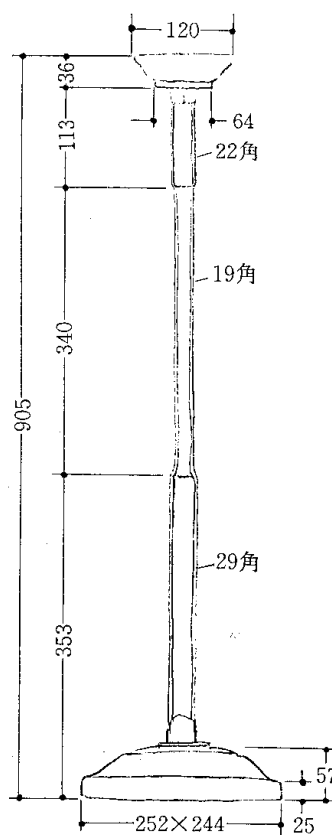
図一30 磬架 X線透視写真

せ釘留めする。表面はいずれも宝相華文を鋤彫りとする。

山形架木には磬架用のつり金具を一对取付ける。四弁の小さな座金をおき、わり足を上面に通して曲げる。一方の支柱側面上方には撞木掛の折釘の痕がある。



図一31 磬架 金粉



図一32 螺鈿平塵燈台実測図

螺鈿平塵燈台 (図一33, 34)

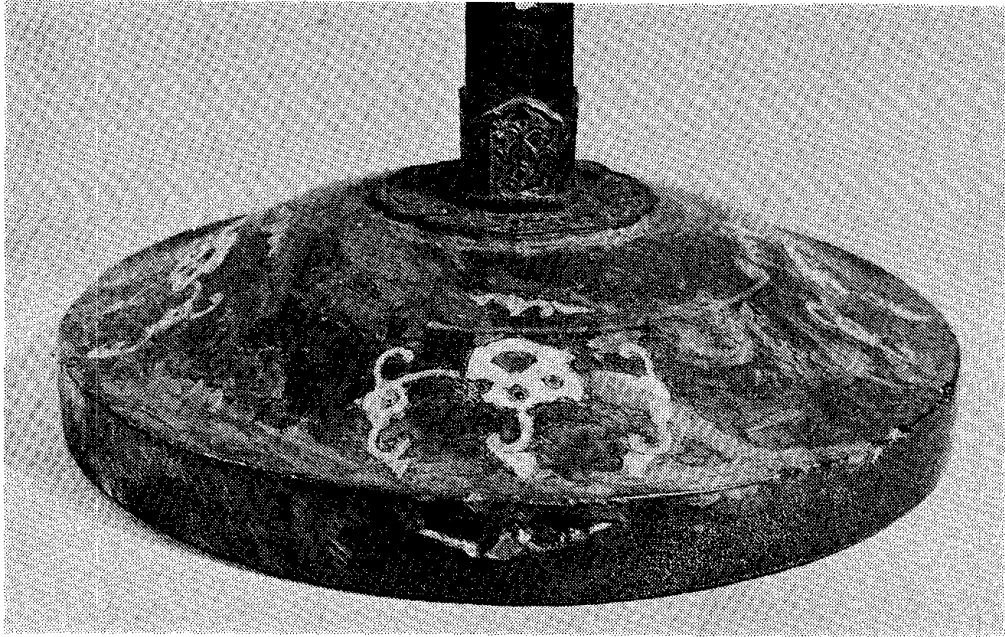
円形の基台に狭い面取りを持つ竿を立て、頂上に小鉢形の油杯をつける (図一32)。

基台は比較的単純な形をしており、高い立上りから甲盛りとし、甲盛りの中間には筋を一条入れる。中央の柱穴は基底に達する。竿は中央部で長さ34センチほどを細くして変化をつける。油杯は口造りが厚く見込みは浅い。高台部には四方に一個ずつの釘穴があるが支持金具が取付いていたか。

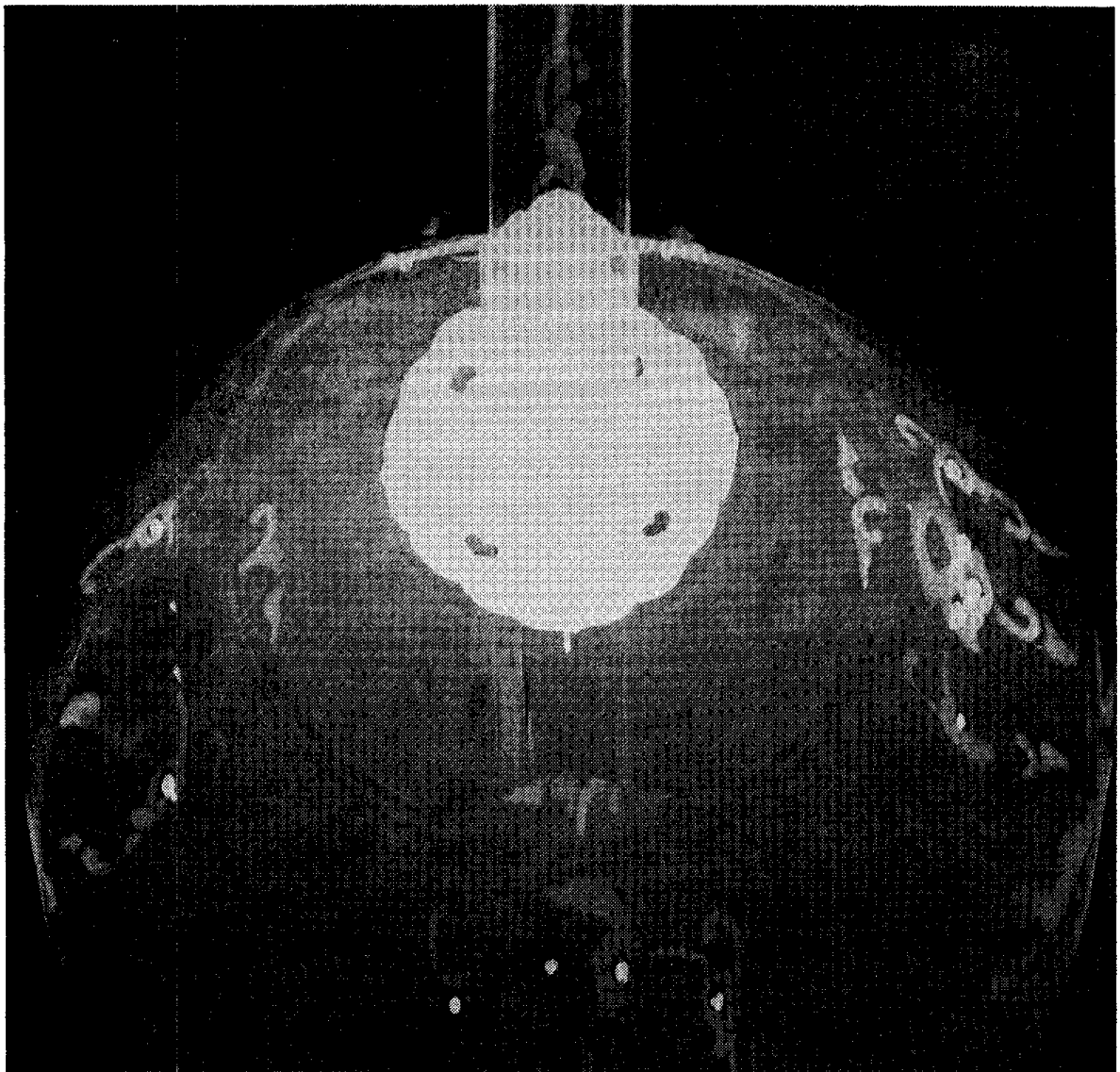
材質は基台は桂、支柱は檜か。

基台の底面は8ミリほどえぐって素地のままとし (図一35)、油杯内は平塵地、その底部を塗漆する (図一36)。他面はすべて沃懸地螺鈿とする。竿、油杯、基台の接合部分には根巻金具が取付き、後者には座金をはまる。

竿の上部、くびれ部分に折損がある。この部分は46ミリほど相欠きとなっており、それを2



図一 33 螺鈿平塵燈台 (大長寿院)



図一 34 同上燈台基台X線透視写真



図-35 燈台基台底部

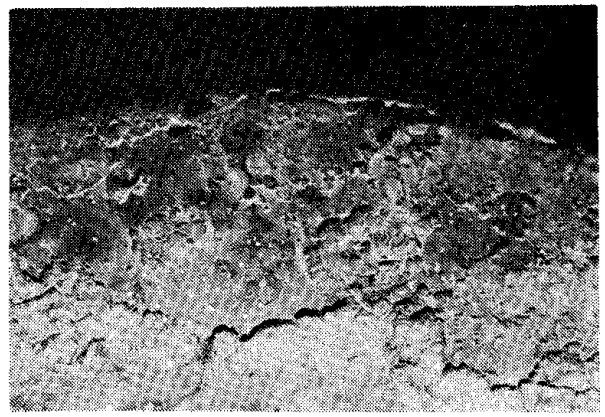


図-36 燈台油杯内面



図-37 燈台 竿X線透視写真

本の釘（丸釘？）で留めてあった。相欠きの上端はくびれ部分の上端に達しており、その部分は相欠きの下端と共にノコギリで切ったように直角に継がれる。この部分を修理した際には折損部の上下端を大胆に削り取って接合したらしい。接合部には小螺鈿が接近して残存するが、それがこの部分にあった螺鈿文の一部と考えれば、上下部に嵌装される螺鈿文との距離関係から、折損で欠落した長さは 10 cm ほどに及ぶ。結果的にこの支柱の実高は 1 m 以上になるう。

X線透視では釘は下端からの柄にしか残っておらず、又この柄は根元で更に折損した痕跡がある。この部分は重修している事は明らかである（図-37）。

螺鈿の嵌装はダイタイ彫りによったかどうかあまりはっきりせず、X線透視によっても基台及竿にはその存在を確認できない。ただ基台立上り部の螺鈿、油杯側面の螺鈿にはダイタイ彫りに近い半月形の破損が見られる。基台甲盛部中間の溝は螺鈿部にスムーズに続くが、これを漆地粉で作ることはかなり難しい。円成寺蔵の黒漆螺鈿燈台では螺鈿嵌装はダイタイ彫りによるが、ここでも溝の部分はダイタイ彫りをさけている。この燈台の場合螺鈿嵌装は文様彫込み法で行なわれたのかもしれないがやはりこの溝はさけた事が考えられる。

螺鈿文は甲盛り部の文様など、独創的ともいえる繊細な構成を示すが、一つ一つの

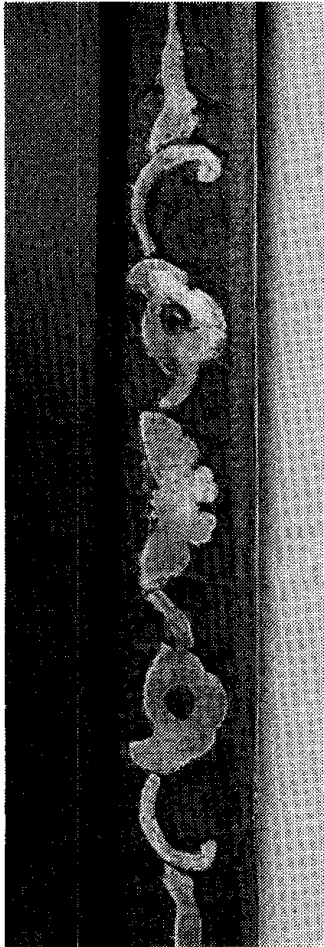


図-38 燈台 竿の螺鈿

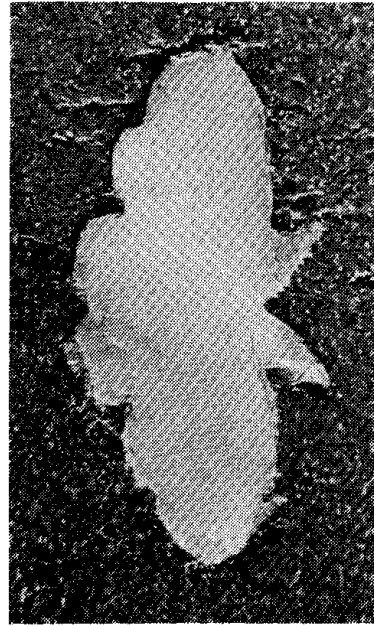


図-39 燈台 竿の螺鈿細部

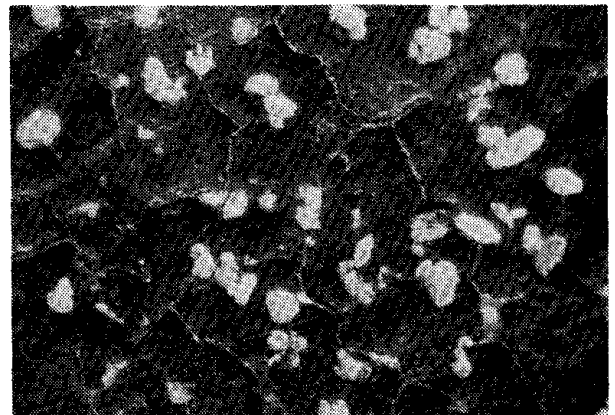


図-40 燈台 金粉

螺鈿形はかなり粗雑で、当初から完形でない貝も使用しているのが伺える。竿の螺鈿文も形が歪んでおり、それらが宝相華文として有機的に構成されていない所がある。中央花のかわりに蝶形を置くのも意表をつくものだが（図-38）、上部には葡萄文形の貝さえ配されている。

油杯はその側面に螺鈿文が三方に嵌装されたたてていたが、今はその内の一つの文様の一部が残存するのみである。

宝相華螺鈿文の不完全さに比すれば、竿に点在する蝶文は愛すべき形をしている。ほとんどが二本の触角を前に出し、羽文には小さな五つの切込みを入れる。宝相華文の一部に配された蝶文は、これらよりやや複雑で、切込みも大きく、小羽根も作り出される。

宝相華花芯には緑色、透明の小玉が所々に残存している。

沃懸地は比較的破損が少ないといえる。破損部は不規則で特に特徴を示さないが、漆地粉層が非常に薄く直接素地に塗布される事が保存につながったと思われる。

粉蒔は淡く、どちらかといえば平塵地に近い。粉形は米粒形も若干混じるが、一般に円形に近いものが多く、粒子はかなり揃っている（図-40）。

蓮華唐草文蒔絵大壇（図-41）

蓮弁の浅肉彫りを持った側板を四方にまわし、上に五枚矧ぎの天板をのせる。側板は黒漆

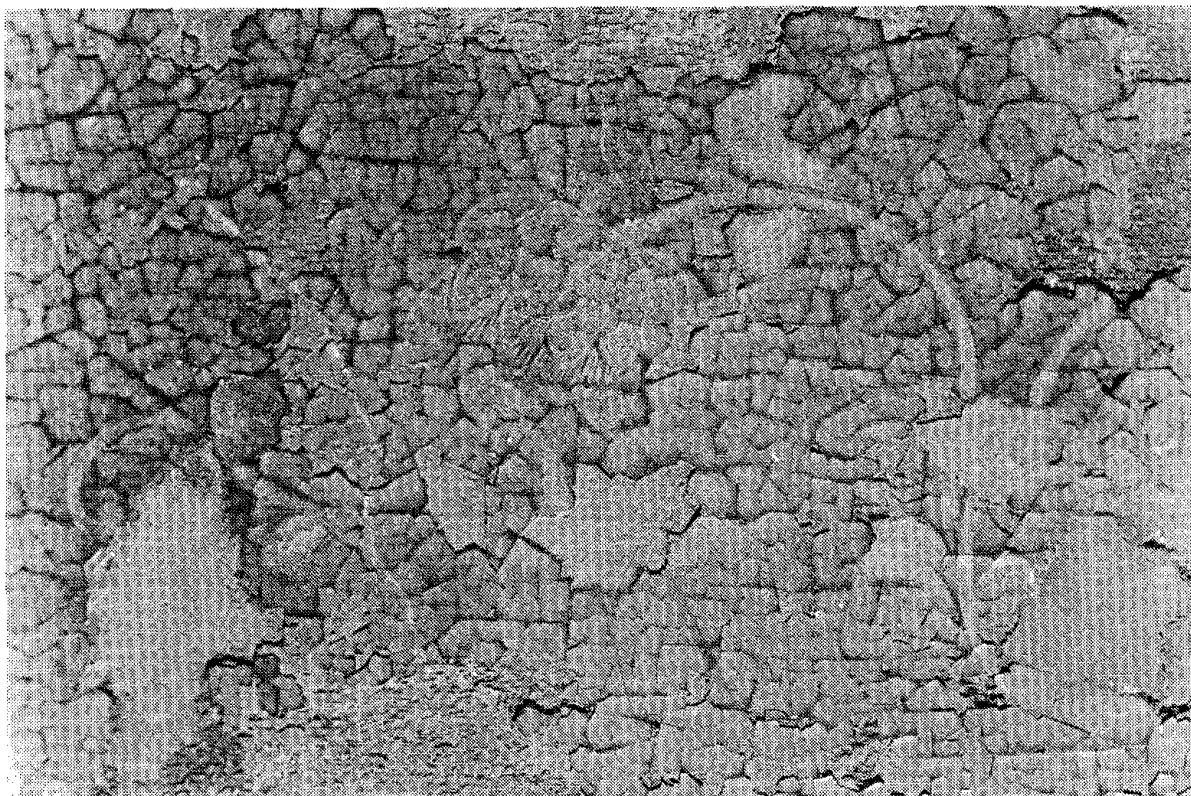


図-41 蓮唐草文蒔絵大壇（地藏院）

塗，天板表面は黒漆地に蓮華唐草文を金銀で研出蒔絵とする（図-42）。

側板は前後の二枚と左右の二枚の厚さが異なり，天板の木口にあたる側板は33ミリ，天板側面のは37ミリある（この内一枚は後補）。四隅は柄組みとし，今は丸釘で留めるが，当初も釘打ちとしたかどうかは不明。

天板の嵌込みは側板の内角を削って行いが，この施工は天板木口面のみで行なわれ，天板側面では側板にのせない。壇内面では板矧目に直行して二本の根太を通す。

現在，天板と側板との境には四方に木屎彫りがなされ，弁柄色のサビがつまるが，この施工は当初とは思われない。

なお，天板を裏面で見ると，明らかに割板の状態を示すものが二枚あり，他はヤリカンナの跡が全面に見える。表面でもヤリカンナの刃痕の著るしい所がある。

内面には又天板矧目の部分と側板との合せ目に布着せの痕跡があり，これは当初の施工と考えられる。

天板表面は全面布着せとするが，今はそのほとんどを失い，布着せ用の麦漆が厚く付着して素地を覆っている（図-43）。布着せは側板の上面まで及ぶが側面までは達しない。

漆地粉は淡茶色の粗いもので，厚さは1ミリ以上に及ぶ。漆地粉及塗漆部分は島状に点々と残存するが，いずれも表面には特徴的な網目断文が広がる。

蒔絵はちらし文としており，根を蕨手状にまるめ，開花した蓮華を中心に唐草風に蔓を延ばす。銀粉は主に葉に，金粉は蓮華と蔓に用いるが，葉の返しの部分は金を蒔き，すじを書割りとして墨線風に表わす。蓮華の部分は肥瘦のない線できくり，やや粗い粉を内蒔きとする（図-44）。

内蒔きの粉は線描の粉に比較すると数倍粗い。やや長目の粉が多く，粒子は揃っているが漆下に沈むものも見られ，平目粉に近い形状を示す。線描の粉も円味の少ない不定形のものであ

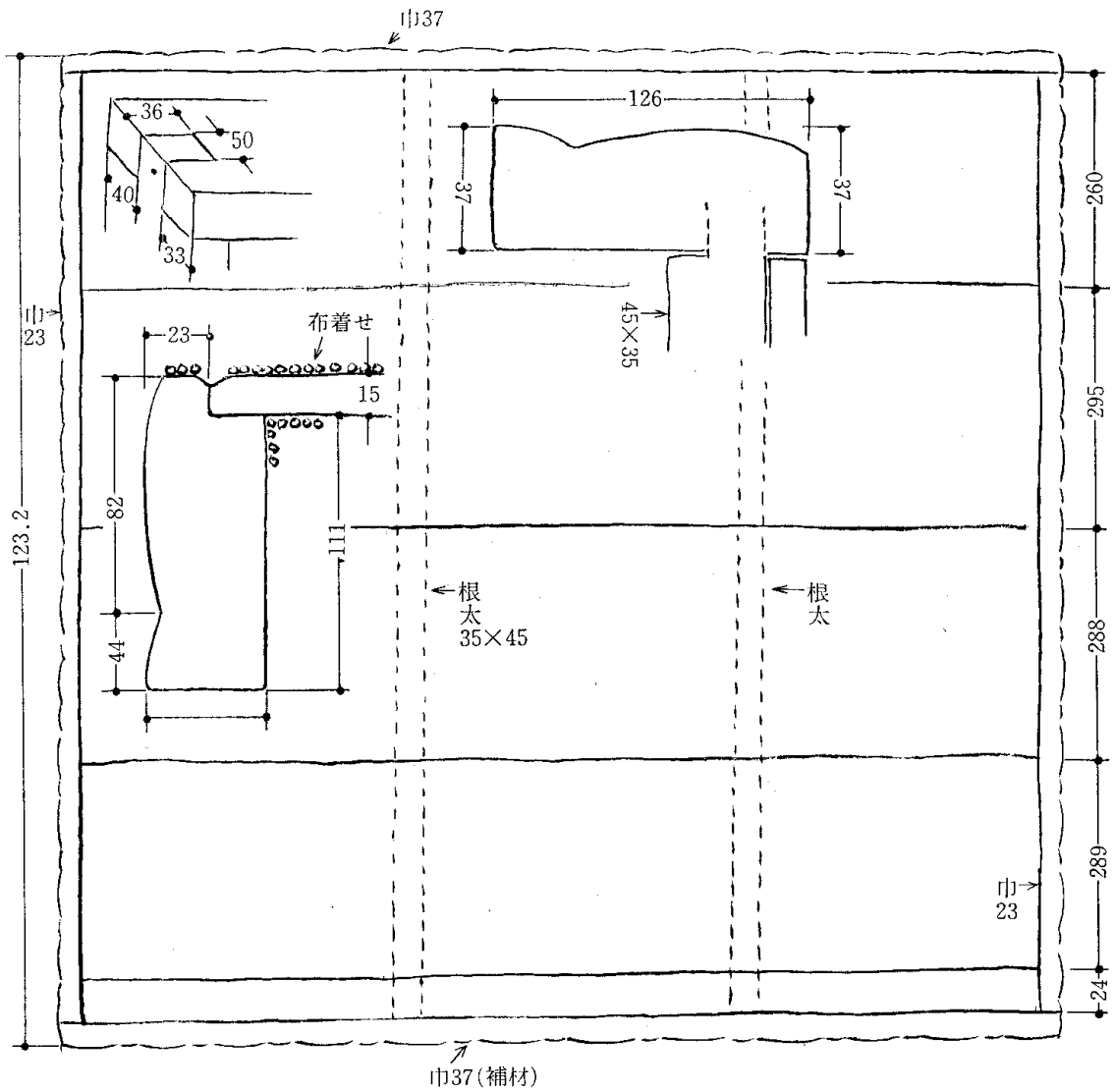


図-42 蓮唐草文蒔絵大壇実測図

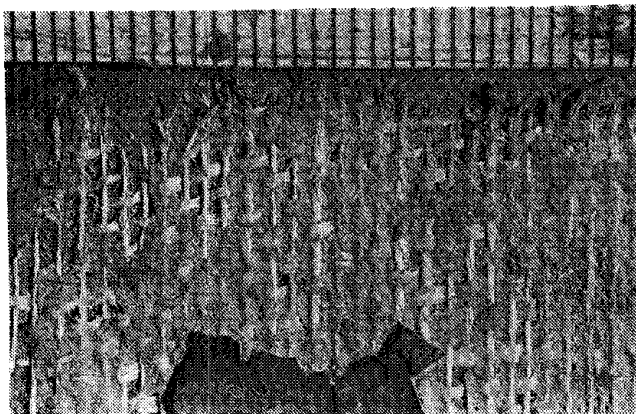


図-43 蒔絵大壇 布着せ (目盛ミリ)



図-44 蒔絵大壇の蒔絵

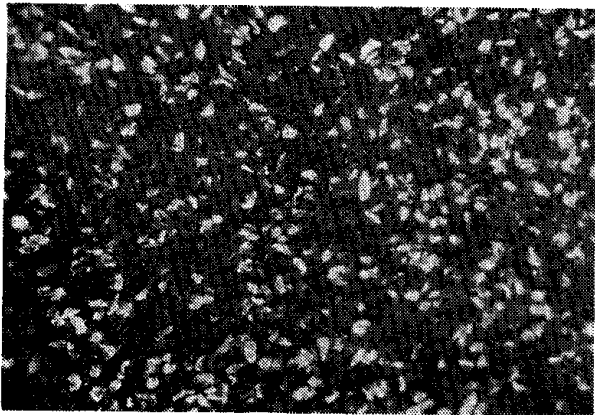


図-45 蒔絵大壇 内蒔粉

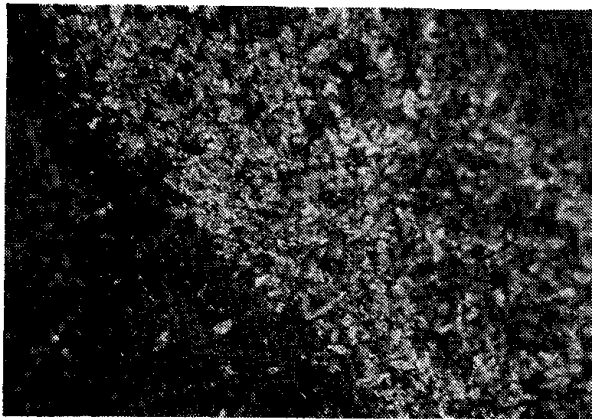


図-46 同上 線描粉



図-47 蒔絵大壇 側板状態

る(図-45, 46)。

なお側板表面には素地に直接黒い漆が塗られるが、真黒で多分掃墨を入れた漆であろう。二度ほど塗られるが当初のものかどうか不明(図-47)。

堂内具の内、この蒔絵大壇は異色である。蒔絵技法も葉を銀で表わす等類例のない表現法が見られ、黒漆地のままとする蒔絵も珍しい。蓮唐草文も、奈良博蔵の蓮唐草蒔絵経箱のに比較すれば、その描写力は自ずと情感の乏しいものになる。

螺鈿平塵案(図-48, 49, 50)

金色院蔵の案は三基遺され、ほぼ同形であるが、その製作技法や現状は必ずしも同一ではない。すなわち

〔その1〕 天板517×254ミリ、高427ミリ(図-51)

〔その2〕 " 524×254ミリ、高428ミリ(香様透金具入れる)。(図-52)

〔その3〕 " 519×248ミリ、高472ミリ(修復により原状そこねる)。(図-53)

これらについて知見を述べておきたい。

〔その1〕

天板は長方形丸隅、四隅には背の低い鷺脚を対角線上に取付ける。脚上部には框を四方にまわし、天板との間に前後面の中心に雲形の膜板を据える。ただ脚部の膜板はいずれも失っているので香様形にはなっていない。框はすべて後補である。

天板側面中央には前後面に飾金具を打つが隅金具はすべて欠。膜板には覆輪を取付けてお

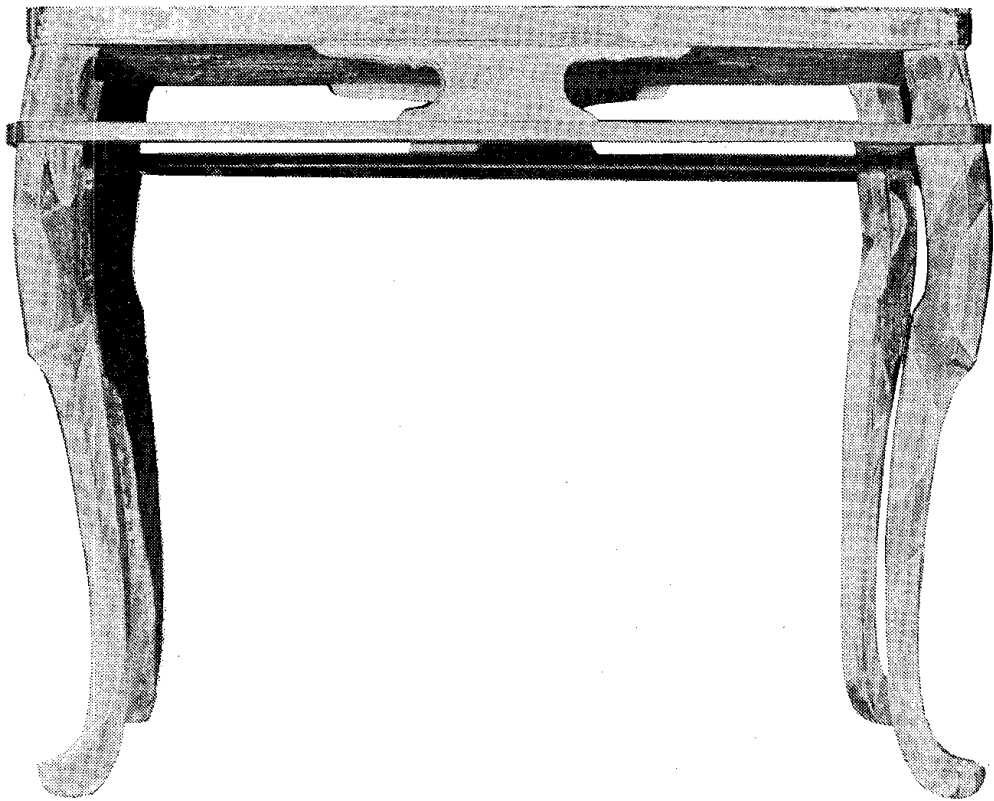


図-48 螺鈿平塵案（金色院）その1



図-49 螺鈿平塵案（金色院）その2

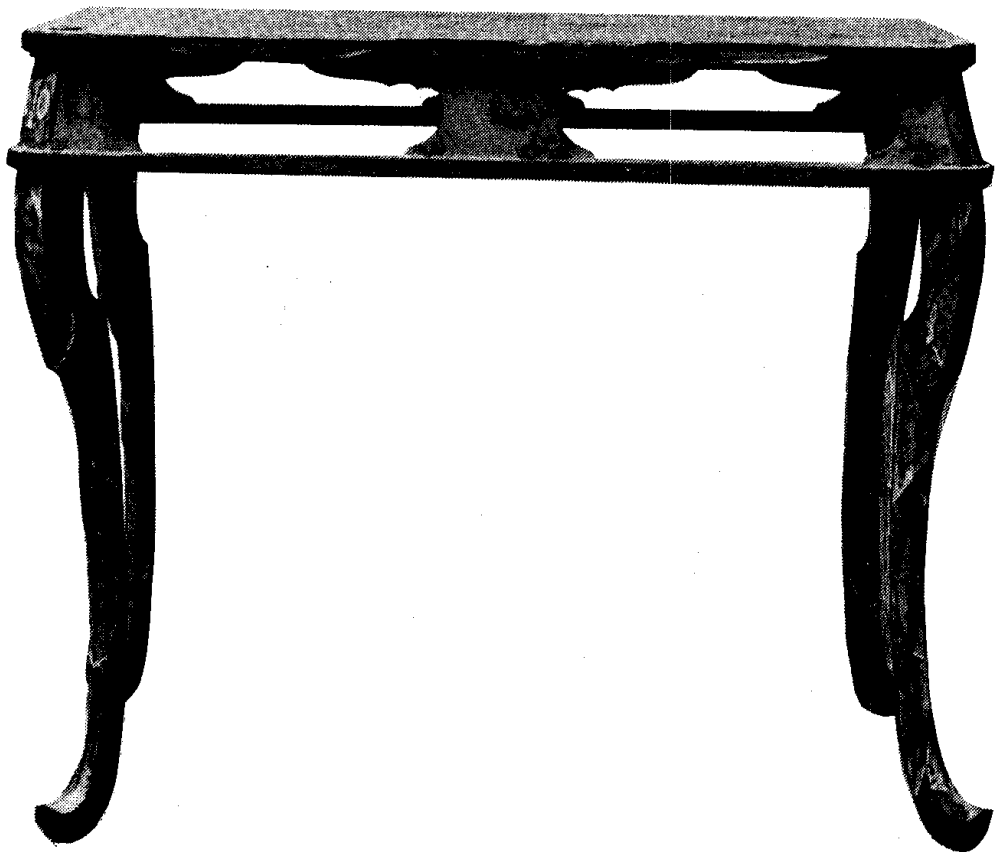


図-50 螺鈿平塵案（金色院）その3

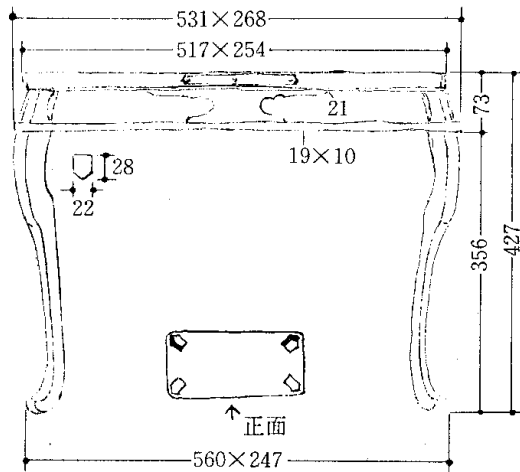


図-51 螺鈿平塵案（その1）実測図
（脚の太線部 螺鈿なし）

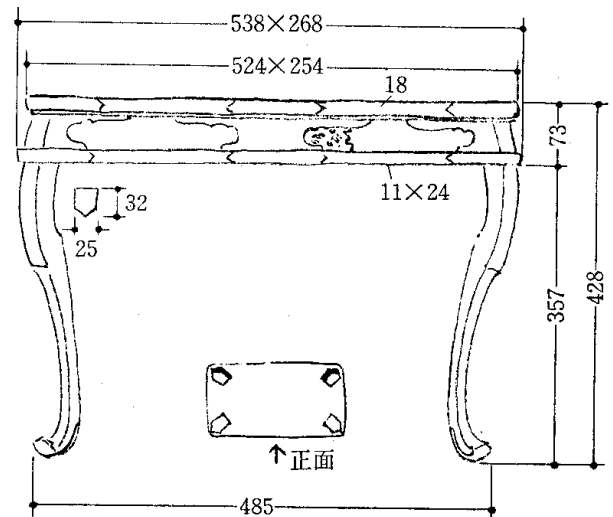


図-52 螺鈿平塵案（その2）実測図
（脚の太線部 螺鈿なし）

り、前後面とも片側のみ残存する。沓金もすべて欠。

天板側面は濃い沃懸地，膜板，鷺脚は平塵地で飾る。現状での施工は極めて変則的で正面性を持たせた施工が考えられる。すなわち，今正面と思われる面の天板側面では濃い沃懸地とし，中央飾金具を狭んでダイタイ彫りが見られ，鷺脚にもダイタイ彫りが見られるが，裏面と思われる他面は，天板側面には淡い平塵地のみで螺鈿は飾られていない。しかし膜板にはダイタイ彫りがありこの案唯一の螺鈿が三個残存し，地は淡い平塵地としている（図-54）。又こ

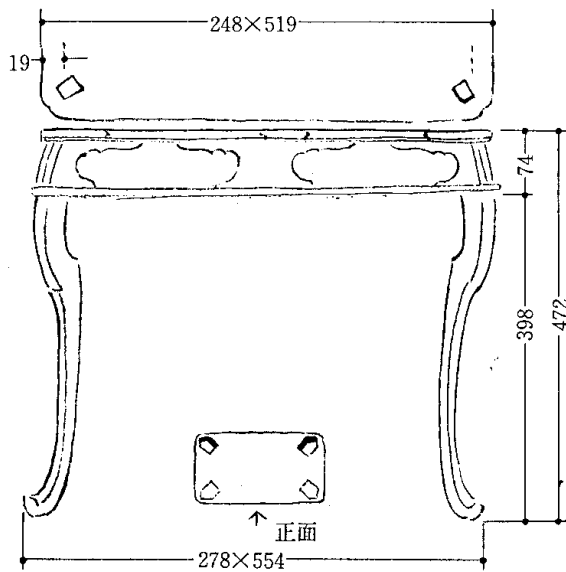


図-53 螺鈿平塵案（その3）実測図
（脚の太線螺鈿なし）

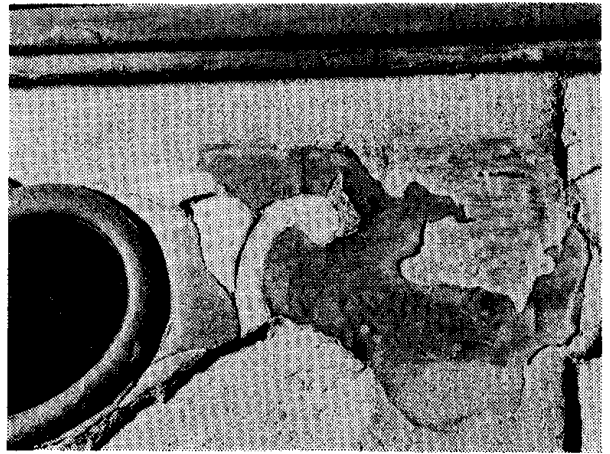


図-54 螺鈿平塵案（その1）膜板細部

の面の鷺脚は両脚とも稜線から向って右側でダイタイ彫りを行っておらず平塵地のみとする。このような螺鈿の節約は今まで述べた遺品には見出されない施工だが、この案の正面性を決定的なものとしている。ただ螺鈿の節約面はいづれも右側のみで行っているので、左右対称とはならず、右脚は右短側面を向いてしまっているのは解せない（図-55）。

裏面の膜板に螺鈿が遺存するのは正面性からはずれるが、今の姿は当初からのものでなく修復されている事を考えれば取違たものであろう。

裏面膜板螺鈿残存部にはダイタイ彫り内に黒色漆地粉が塗布される。

その上全体に塗布された漆地粉は極めて薄いものである。鷺脚の平塵地部に施こされた漆地粉も中尊寺地粉系の淡茶色のもので、やはり薄く1ミリに達しない。

天板側面の沃懸地粉は漆膜下に沈むものも多く、粉形は揃わず雑然としている（図-56, 57）。

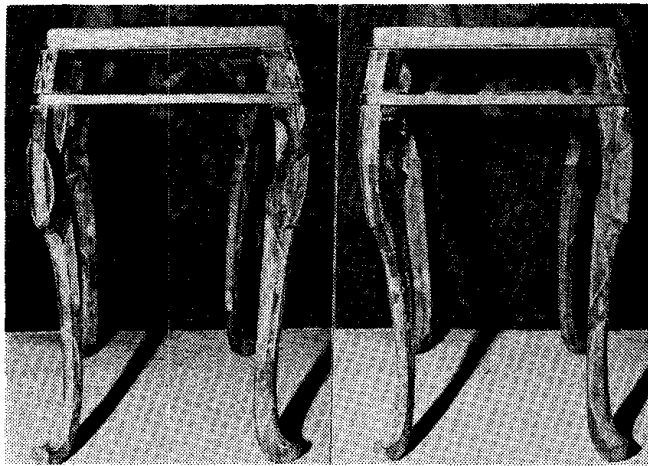


図-55 案（その1）両側面

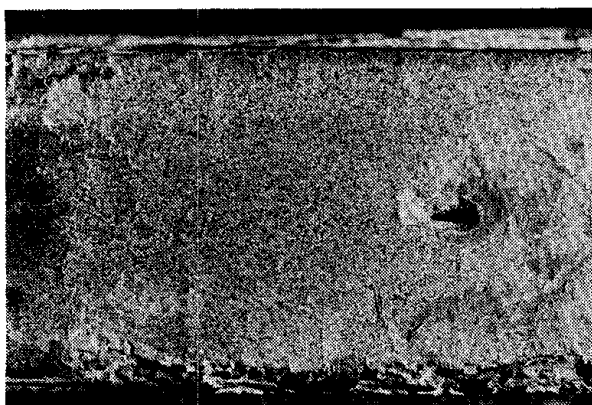


図-56 案（その1）天板側面沃懸地

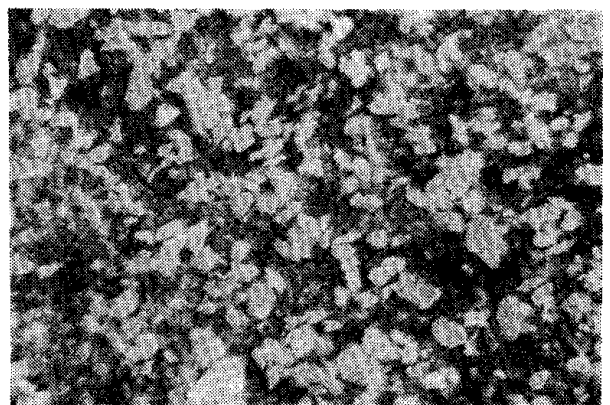


図-57 案（その1）沃懸地粉 左同

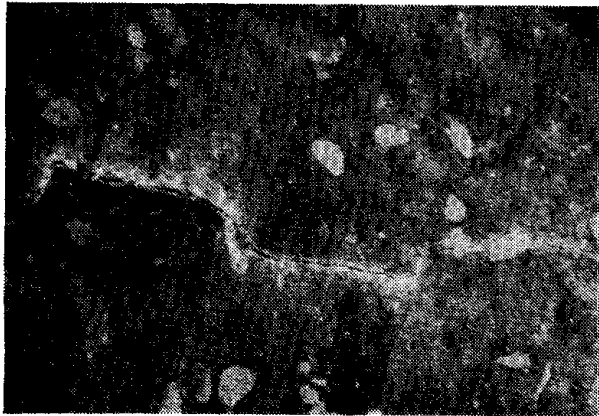


図-58 案(その1) 平塵粉

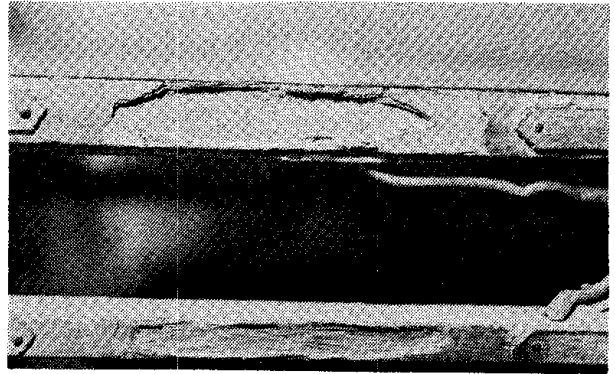


図-59 案(その2) 正面天板, 框側面

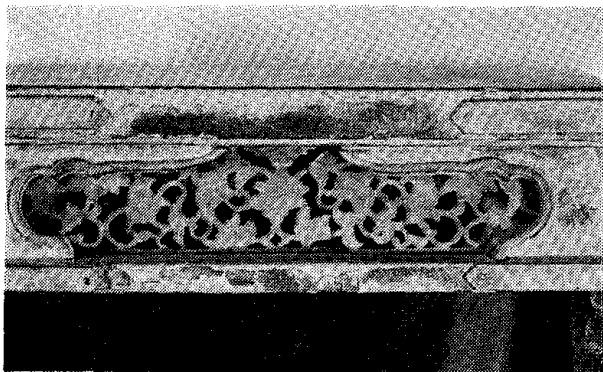


図-60 案(その2) 裏面天板, 框側面

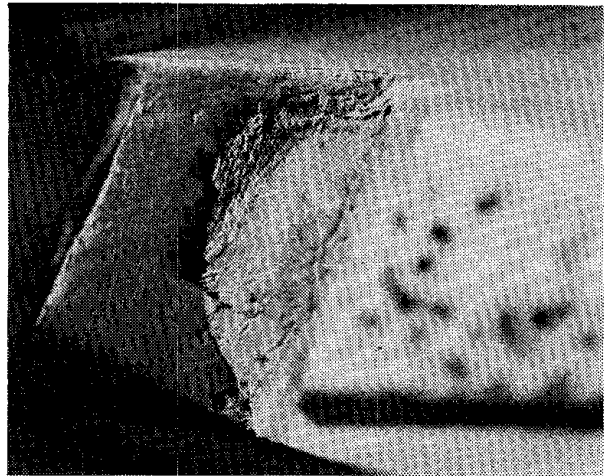


図-61 案(その2) 布着せ

一般に粗粉には楕円形が多く、粗粉は鋭っている。一部の粗粉に重なり合うものがあり、平目粉状をしている所に留意したい。

平塵粉は沃懸地粉と同形で、不定形の楕円形をしており、粒形は比較的揃っている(図-58)。

〔その2〕

この案も又正面性を意識した施工を行っている。

天板は四隅を入隅とし、両端には端喰を入れる。甲面、裏面は塗漆とする。側面では四隅と前後中央に宝相華文魚々子地八双金具を飾る。前面と左右面には飾金具の間にダイタイ彫りを残すが、裏面にはなく、平塵地のみとしている(図-59, 60)。框側面も天板側面とまったく同じ施工を示す。前後面の二間、左右面の各一面の香様には金銅透金具(宝相華唐草文)を内面から釘打ちで留め、膜板には覆輪をかける。ただ正面向って左の透金具は欠損、右のも4分の3を失う。正面では両端の膜板も欠損している。左右面の透金具の内、向って右面のは後補。左面には毛彫りがある。透金具は後面の二枚は良作である。香様に通る鷺脚の正面左と右面右には蝶形の小螺鈿が辛じて遺存する。

正面2本の鷺脚にはダイタイ彫りが行なわれているが、裏面2本では稜線の内側に向く面には行なわれず、平塵地のみとしている。脚先には沓金具が遺存する。四本の脚の裏面には蝶文を嵌装したと思われる小形のダイタイ彫りが三個づつあり、又各ダイタイ彫りには玉装の痕跡がある。

正面左脚の上部内面には一部に布着せが行なわれている(図-61)。

脚には所々に漆地粉が露出するが中尊寺地粉系の淡茶色のもので、素地の上に薄く塗付され

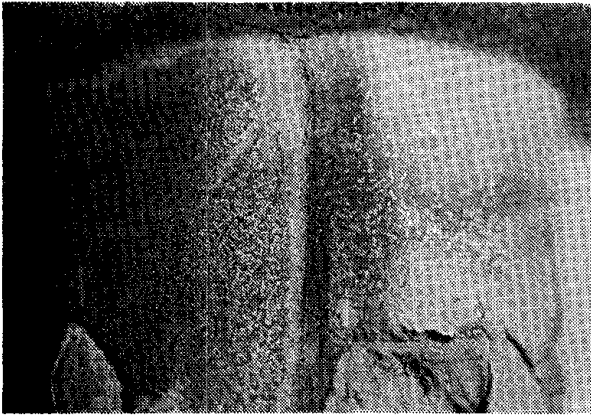


図-62 案(その2) 沃懸地蒔分け状態
(左-正面, 右-短側面)

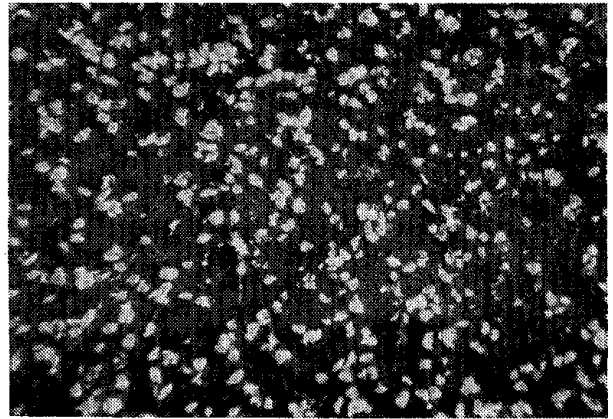


図-63 案(その2) 沃懸地粉

る。

沃懸地は正面の天板側面, 框側面, 香様間に出る脚上部の正面のみ等は濃い沃懸地とし, 他面はすべて淡い平塵地である。特に脚上部での蒔分けははっきりしており, 中央入隅線で沃懸地と平塵地を区別している(図-62)。

沃懸地粉, 平塵地粉とも不定形の円形粉で粒子はかなり揃っている(図-63)。

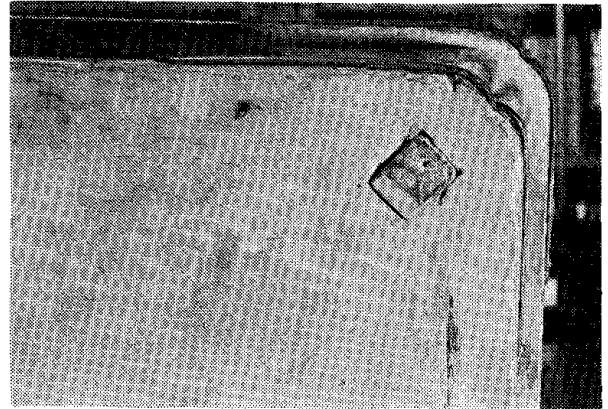


図-64 案(その3) 甲面

〔その3〕

表面全体は近年の修理を受けてサビに覆われ, 古風さはまったく失われている。

この案も〔その2〕と同様正面性を意識した省約の施工が見られる。

天板は四隅を入隅とし, 両端は端喰を入れたらしい痕跡がある。甲面には鷺脚の上端が柄となって四隅に突出している(図64)。裏面はその修理をまぬがれていて, まだ当初からの趣を残しており, 薄い下地を持つ塗漆層が僅かに付着する。網目が入



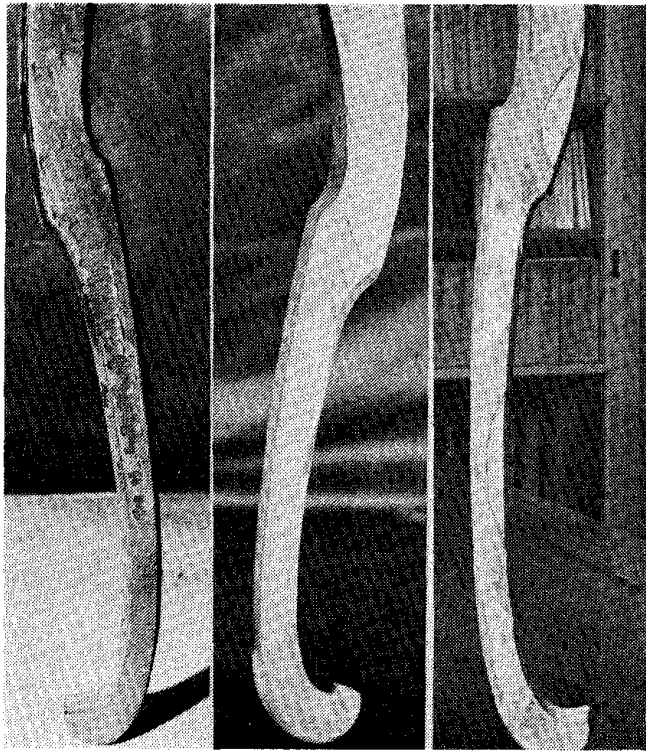
図-65 案(その3) 天板裏面

り風化が進んでいるので, この面が当初は甲面ではなかったかとも疑うが, なおよく見ると, ひっかきによる当線が中央に二本, 四隅には対角線が入っている(図-65)。

天板側面には正面で中央八双金具を狭んでダイタイ彫りが二個所, 左右側には一個所ずつ彫られるが裏面にはなく, 框には正面にも施されていない。

鷺脚には前二者とほぼ同様の規模でダイタイ彫りがあるが, 後脚2本は〔その2〕の施工がくり返えされている。又脚裏面には四本とも蝶文を嵌したと思われる菱形ダイタイ彫りが三個ずつある。この案の脚形は前二者に比し削りが深くやや洗練さに欠けるが力強い(図-66)。

八双金具は天板側面の正面に三個と, 裏面で向って左に一個, 当初のが残存するが, 框のは



(その1) (その2) (その3)
 図-66 金色院藏案の脚の比較



図-67 案(その3) 沃懸地貼付状態

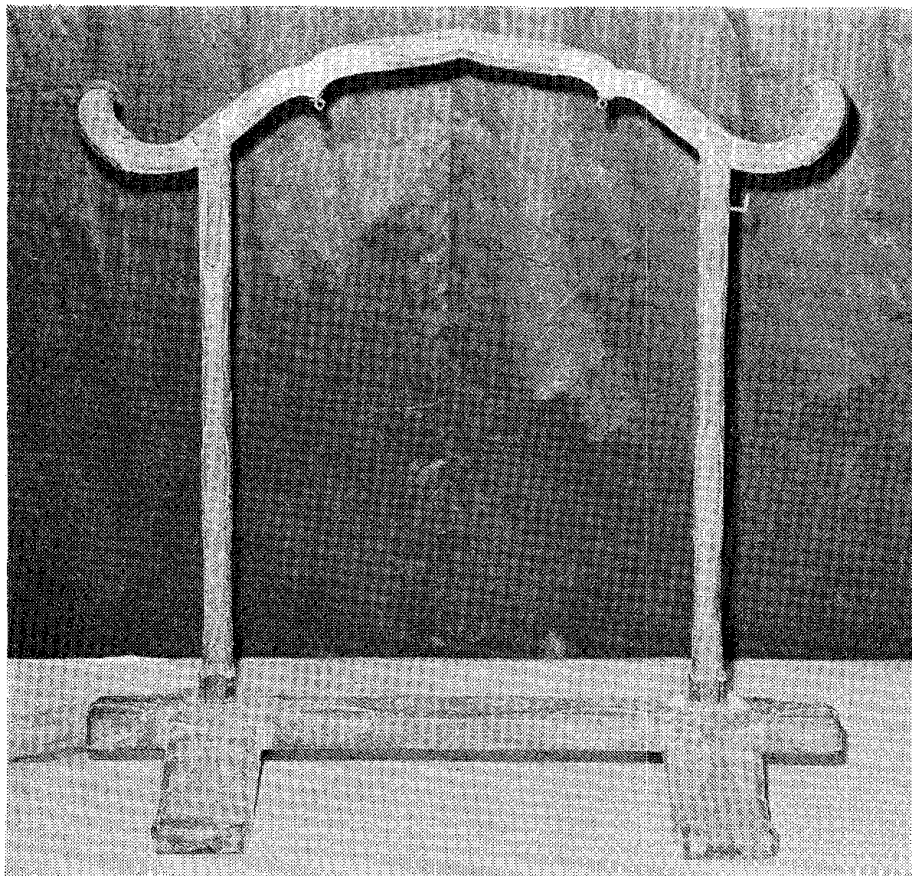
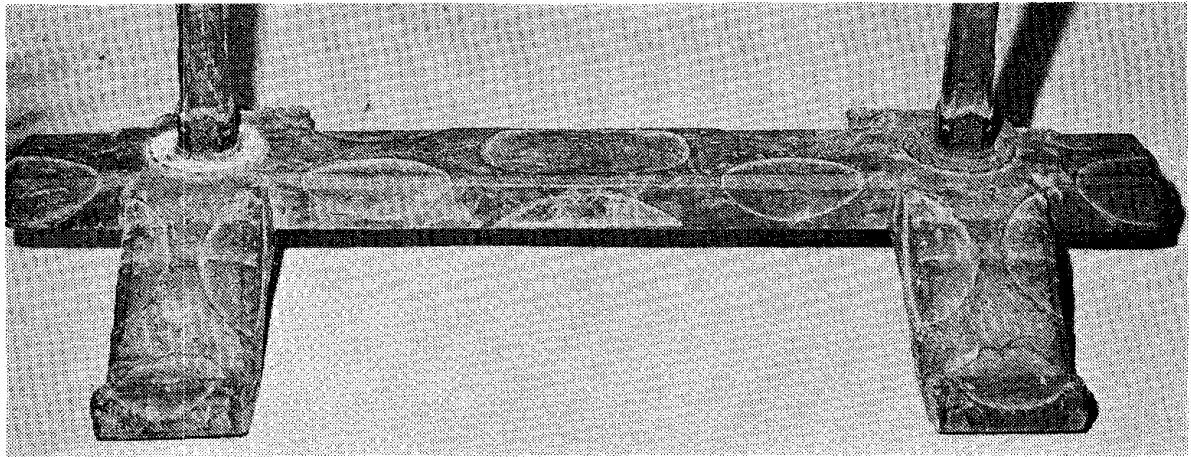
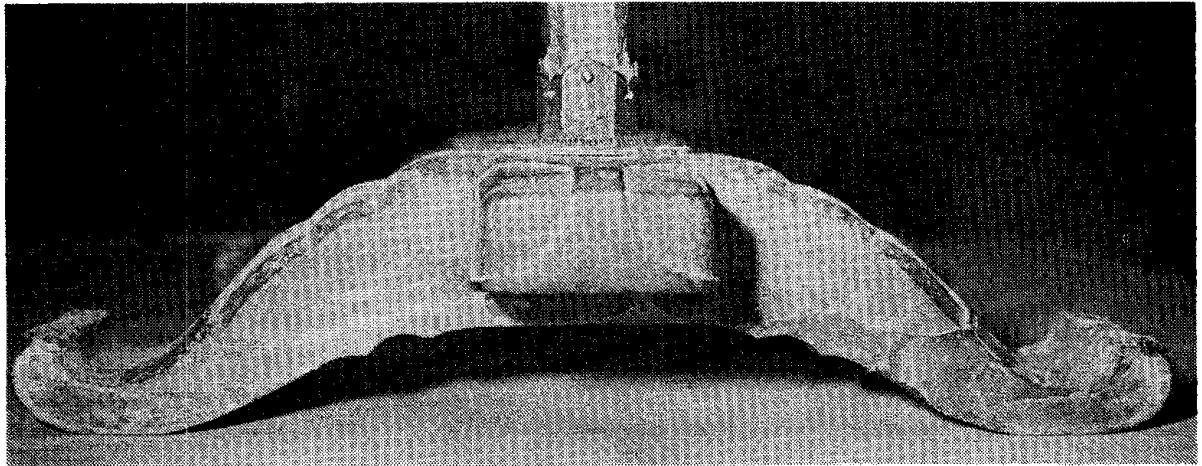


図-68 磬架(金色院)



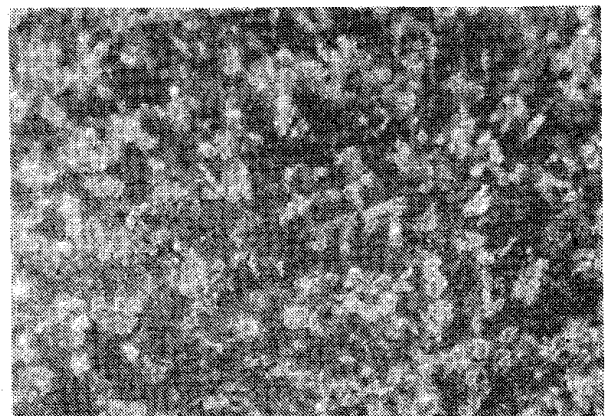
図—69 同前 脚部



図—70 同上 脚側面

すべて後補である。ただ正面中央の透金具は半分を遺存。沓金はすべて欠。

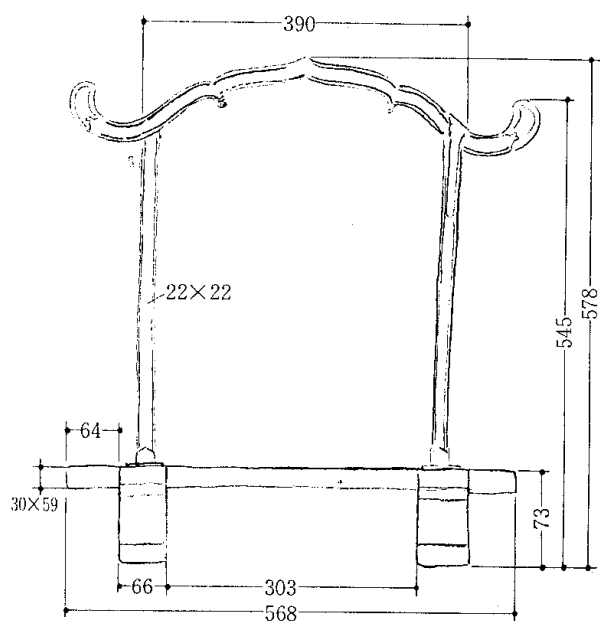
甲面を除く所々に沃懸地断片がサビ地の上に貼付けられて残存するが、ほとんどは近代の沃懸地で、その内の幾つかは当初のものと思われる平塵地断片である。(図—67)。脚に残存するものに比し、天板側面のはやや蒔きが濃い。粉形は細長粉が目立つ様だが、粗細粉が混じ合って雑然としている(図—71)。



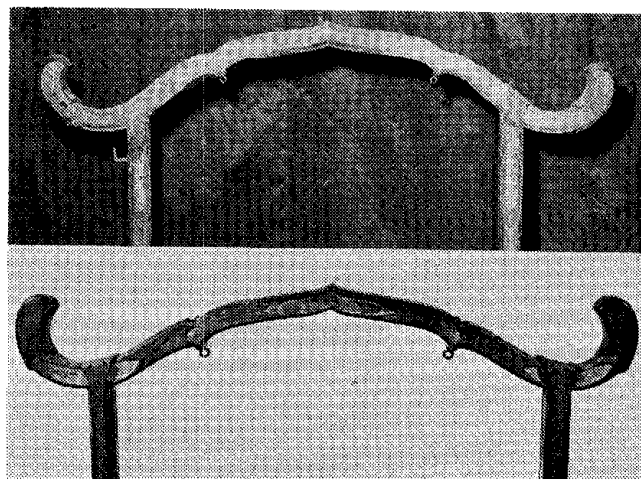
図—71 案(その3) 沃懸地粉

螺鈿平塵髻架(図—68, 69, 70)

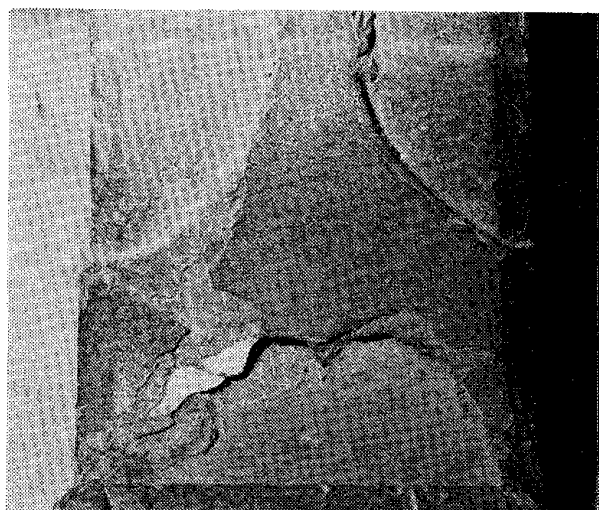
大長寿院蔵の髻架とほとんど同じ構造だが、法量形体は細部で多少相異を見せる(図—72)。形体の上で違いを示す所は幾個所か指摘出来る。まず山形架木の蕨手の反りは、大長寿院のものがやや巻きが強く、その先端は中央山形の高さまで届くが、この金色堂のはゆるやかにのびて自然である(図—73)。又刳形脚の形体は大長寿院のは髻股のように両肩が中央部より盛上ってはいるが、プロポーションはやや圧縮されて張りがなく、刳りも形式的である。金色院



図一72 螺鈿平塵磬架（金色院）実測図



図一73 金色院（上）と大長寿院（下）山形架木比較



図一74 磬架 脚部螺鈿



図一75 磬架 支柱の漆地粉

のはふんばりが強く、中央部も厚味があって全体に豊かさがあがり、削も彫刻的である(図一26, 70)。

形体は全高、貫長はほとんど同寸だが、支柱は金色院のは若干(1ミリ)ほど細い。大きな違いを見せるのは脚の部分であって、脚長は金色院蔵が少し長く、脚幅も5ミリ、厚味も9ミリ大きい。貫も金色院蔵のがかなり太い。

一方大長寿院蔵のに遺存しない螺鈿も、脚の先端反上り部分に辛じて二個ほど付着する(図一74)。

螺鈿の全体の配置はダイタイ彫りによって伺え、支柱、山形架木で見ると大長寿院蔵では多分蝶文を嵌したと思われる小ダイタイ彫りが中間に配されるが、金色院蔵にはないのが目立つ相異といえる。

沃懸地は両脚のダイタイ彫り以外の部分にかなり広く残存し、支柱にも一部付着している。金具下に僅かに露出する漆地粉は淡茶色の中尊寺地粉系のものである(図一75)。

沃懸地粉は大長寿院よりも古風で、米粒形細長形が目立ち、一般にはあまり角ばっていない。小粉も混じるが粒子は揃っているといえる(図-76)。

金具類は揃って残存するが、支柱と山形架木を補強する金具の一方は、半分が欠損する。これらも大長寿院蔵に比較すると細部で微妙な違いがあるのは当然であろうか。

両院蔵共金具類には宝相華文が鋤彫りされるが、金色院蔵は画面に対しやや小振りに彫られ、それが引締って生動しているのに対し、大長寿院蔵のはやや大振りで生命感が不足しているように見える。

支柱根元を支えるササラ金も金色院蔵のは低く、座金も薄く華奢に仕上げられる。支柱上部には撞木掛金具が付属する(図-77)。

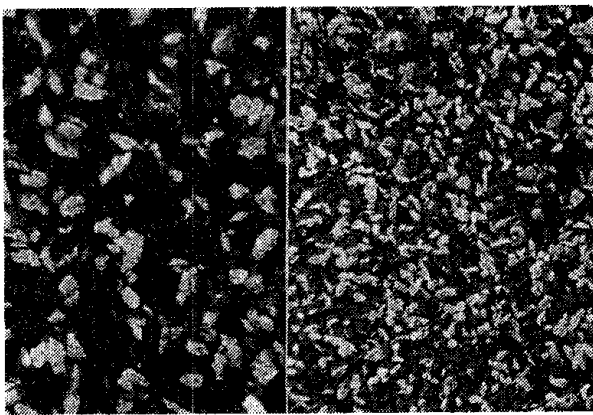


図-76 磬架 沃懸地粉 (左20×, 右40×)

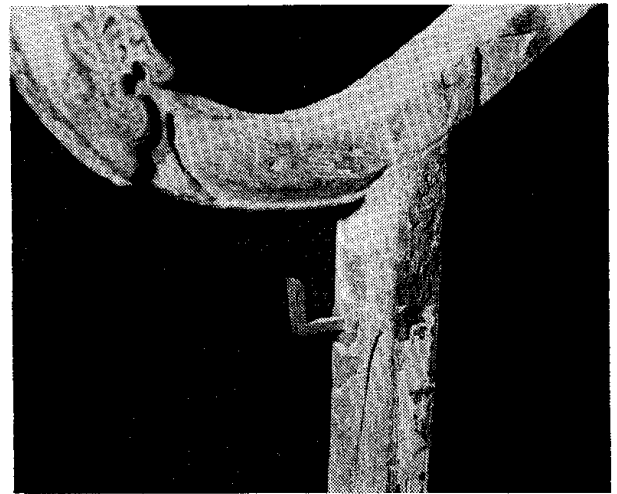


図-77 磬架 撞木掛金具

3. 堂内具の製作年代

中尊寺金色堂の漆芸技法については、先に小論で述べた事があるが、そこでは中央壇と南北壇との間で、施工上に幾つかの大きな相異がある事を指摘しておいた。その第一は黒色漆地粉が中央壇になく、南北壇にのみ見出せる事実である。

中尊寺堂内具の漆芸遺品についても、今まで見て来たように黒色漆地粉の施工した物が多く、この結果を敷衍して考察する事は当然有効な手段と考えられる。更にもう一つのポイントはやはり沃懸地粉の形状についてである。これについては金色堂沃懸地粉群を主軸に、時代的

	黒色漆地粉	螺鈿	金具	粉	天板	その他
八角須弥壇	○	組合せ文		細長粉		
木造礼盤	○			円形状(平目)		
螺鈿平塵案	○			米粒形	端喰	
磬架	○		ササラ金高い座金厚	米粒形		脚裏にあたり線
螺鈿平塵燈台		保存よし		円形		甲面・裏面に布着せ
蒔絵大壇		無		平目状	割板	
螺鈿平塵案(その1)	○	三個残		平目状(楕円)		
螺鈿平塵案(その2)	○	小蝶文残	透金具	円形	端喰	一部に布着せ
螺鈿平塵案(その3)	○	二個残		細長粉	裏面にあたり線	
磬架	○		ササラ金低い座金薄い	米粒形		刳形脚厚

に重要な位置を占め、中尊寺堂内具と製作年代の近い叡島神社御神宝類の内の蒔絵粉との間で比較する事が必要で、それらを基準に考察する事によって堂内具の製作年代はかなり鮮明にする事が出来よう。

堂内具の製作年代を考察するには総合的な見方が当然必要ではあるが、ここでは以上の二点、すなわち黒色漆地粉、沃懸地粉の動向が重要な鍵と思われるので、これらを中心において考察を進めてみたい。

中尊寺堂内具については、金色院蔵の礼盤を除く計十点について概観したのだが、これらの遺品は当然のことながら若干の技法の違いを見せているし、同類品でも法量に寸余の差のあるものがあり、その事実を無視できないが、製作技法の上で黒色漆地粉はほぼ共通して現われる。

黒色漆地粉の存在が確認出来るのは八角須弥壇、平塵案、平塵礼盤（以上大長寿院）、平塵案（金色院）の四点である。この他燈台、蒔絵大壇を除く両院の髻架や金色院の二基の案は螺鈿がまったく欠落するのでなお微妙だが、それらも黒色漆地粉が施工された可能性は大きい。したがってほとんどの遺品にこの特殊な漆地粉が塗付されている事になる。この事は偶然とは思われず、逆説的にいえば、これらの遺品が寄集めて組合されたものでなく、はっきりした意図の上に計画的に造られた事を物語るとしか思えない。

これらの内、八角須弥壇は天治三年（1126）銘をもつ「供養願文」に経蔵建立の記載があってそれに該当させる説もあり、年代的には金色堂に引続いて製作されたと考える事も出来る。しかし、「願文」に疑問の余地がある事を考え、更に先述のように螺鈿等に進歩のあとを認めれば須弥壇も又堂内具とはなれて、特殊な配慮があったとは考えがたい。

平安時代における黒色漆地粉の存在は、今までも折にふれて述べて来ており、その遺品は更に増え当代の螺鈿沃懸地品のほとんどに認められるとあってよい。この技法はなお「特殊な技法」ではあるが、十二世紀の「特色ある技法」として注目されつつあるので、中尊寺堂内具のほとんどに見出す事はさほど奇異とも感じられず、この事実を更に追認する結果となる。

黒色漆地粉の基本資料は金色堂南北壇である事は述べるまでもないが、この南北壇は金色堂完成後（1124）の約30年後、保元二年（1157）の基衡の死、更に約30年後の文治三年（1187）の秀衡の死に際してそれぞれ増築されたとの説が一般的である。そしてこの説は各壇上諸尊の製作年代の推定にも有効で、各壇に現われる新様式にほぼ一致するとされる。中尊寺に安置された仏像にまつわる逸話は種々伝えられるが、いずれもその製作の秀逸さを述べたものである。現在金色堂各壇を占める仏像群も決して当時の二流の作ではなく、遠郊の平泉に新傾向様式がすばやく運ばれる事実に驚かされるという³⁾。

しかし先年の大修理に際し詳細な調査を行った結果では、必ずしもこの説に有利ではない。すなわち両壇はほとんど木工施工が同じである所から、基衡の死後まもなく秀衡が自分の壇をも含めて両脇に付加したものと説が示され、両壇に伴う様式の相異は、製作者が異なるためと解釈されている⁴⁾。

仏像様式による分析と、木工技法による成果の間には異なった見解が提示されたことになる。

これらの説と堂内具の技法より得た事実を検討すると、堂内具から見た場合は木工技法の成果を尊重するのが妥当と考えざるを得ない。

堂内具の施工を念頭におけば、基衡の死後1160年前後、金色堂に両壇が増設された際、単に両壇にとどまらず、堂内装飾もかなり大規模に設備されたと考えるのは不自然でなく、今遺された堂内具も含めた多数の堂内具が製作されたと見做すべきであろう。

この時期、秀衡は円隆寺の造営を終え、嘉祥寺創建に勢力を傾けていたはずであり、南北壇を一緒に造る事は容易であり、好都合であったと想像される。

平安時代において黒色漆地粉がいつ頃から使用されたかは、まだ解明されていないが、遺品から推すと十二世紀後半からでないかと考えている。仏像彫刻における地方への伝播が瞬時に行なわれていた事を思えば、新技法としての黒色漆地粉の輸入は充分予想されよう。南北壇にのみ黒色漆地粉が施工される事実は重要な基点となるのである。運搬可能な小さな堂内具であっても贅を尽した螺鈿沃懸地品をその都度京から取寄せる事などは理想論であって、それらを調達するきっかけは、やはり盟主の死の時期が最もふさわしく、秀衡が財力を傾けて供養したとするのが妥当のように思える。

堂内具に見られる蒔絵粉は、どのように位置づけられるであろうか。これらの内で目につくのは円形粉又平目状粉で、一方では細長粉又米粒形粉の存在も留意される。

円形粉、平目状粉は十二世紀後半の蒔絵粉を代表するもので、その典型的なものは敵島神社御神宝類の蒔絵に用いられている⁵⁾。鎌倉時代の蒔絵遺品に多用される平目粉は、突然に現われたのではなく、既に十二世紀後半の遺品の内にその魁があり、徐々に流行していった事が知られるようになった。これらの粉は外観では見わけにくいだが、一般には漆の下に沈む粉が多く、又重なりが生じている事などで沃懸地粉と区別がつく。

一方細長粉、米粒形粉は十二世紀前半の蒔絵粉を代表するもので、当時としては伝統的蒔絵粉に属するものである。

堂内具に使用される蒔絵粉の傾向は、伝統的製法の蒔絵粉から新製法による蒔絵粉に移行する時期にあたると思われ、極めて興味ある結果を提供してくれる。

4. 結 語

中尊寺堂内具のほとんどの遺品は、他に類例のない稀有の物であり、その漆芸技法は中尊寺様式とも呼称してよい特色ある方法が伺え、ほぼ統一した技法を誇っている。したがってこれらを平安漆芸の内で考察する事はなかなか難しく、いきおい限定された範囲の中で論じざるを得ない。

黒色漆地粉及蒔絵粉は、このような状況の中でいわばメルクマールと考えられ平安時代漆芸に共通する技法として取上げたものである。先に推論した1160年前後の年代はそれらを終着させて出て来たものだが、この頃の平泉は最も安定した時代ではなかったかと思われる。その権勢は中央にも及んで秀衡は鎮守府将軍に任ぜられた。奥州の夷狄と公卿は蔑すんだが、秀衡に悔りがたいものを感じていた事は違いあるまい。

いつの世もそうだが、戦乱の時代に死者を顧る余裕など持てるはずもなく、回向の気持が先祖にむかわせるのは、長期の経済的・政治的安定が必要であろう。

そのようにして造られた堂内具は詳細に見ると、たしかに大長寿院蔵と金色院蔵とでは趣が異なっており、後者に一抹の古風さが漂うのだが、この違いははたして本質的な体臭から生ずるものであろうか。例えば両院の磐架の作行きに五年十年の差があるとは思えない。この差はいわば個性であって、製作者自身の力量によるものと解したい。一方、金色院蔵の螺鈿平塵案の三個は、いずれも正面性を具備しており大長寿院蔵の螺鈿平塵案を代表とする平安時代什器の常識から外れているのは多少気になる。

金色堂南北壇もたしかに施工上からは三十年ほどの距りを感じさせるのだが、それでもなおそこに示される技法に疑問を投げかけざるを得なかった。しかしこれを個性の問題とすれば、極めて消極的な解決法ではあるが納得のいくものとなる。

こうして幾つかの前提を承認した上で堂内具に関する興味は尽きる事となるが、金色堂北壇に見た沃懸地——金地を十二世紀のものと認める結果にもなり、平安時代沃懸地の実体は新た

な境地に踏み込む事となった。

なお、図版で示した三枚のX線透視写真は保存科学部石川陸郎氏撮影によるものである。

稿の終りに数回にわたる調査で御配慮を載いた中尊寺文化財部長北嶺澄仁氏に深く謝意を述べると共に、修復技術部長鈴木友也氏に御教示を賜った事を明記して謝す次第である。

- 1) 拙稿「金色堂内装飾の工芸技法について」『仏教芸術』72 昭44
- 2) 小西暁也「国宝中尊寺八角須弥壇漆工保存修理について」『漆工史』4号 昭56年
- 3) 西川新次「中尊寺壇上諸仏私見」ミュージアム195号 昭42年
- 4) 「国宝中尊寺金色堂保存修理工事報告書」昭43年
- 5) 拙稿「平安時代漆芸技法資料」X『保存科学』21号 昭57年

その他次の諸著を参考とした。

『中尊寺』淡交社 昭57年

『中尊寺』河出書房新社 昭46年

Technical Data of Lacquer Work in the Heian Period (XI)

—Lacquered Articles Which Were Used for Decoration

of the Interior of Chuson-ji Temple—

Toshikatsu NAKASATO

The Golden Hall of the Chuson-ji temple at Hiraizumi, Iwate prefecture was built in 1124 by FUJIWARA Kiyohira. Among the articles for decoration of the interior which have been succeeded in the temple, the author has examined in this paper eleven pieces of lacquered articles.

Through microscopic examinations the author has found the same procedure of lacquer work in all eleven pieces. And the shape of the *Makie-fun* (golden particle used for *Makie* technique) which are observed in the articles, show the typical characteristic of the twelfth century.

Inside of the Golden Hall there are three altar daises one of which is a built-in structured dais. Hence it is supposed to have been made in the same year as the Golden Hall. However, two other daises which are settled beside the built-in dais, show some different features in the style of structure and decorative part.

These are considered to have been made around 1160.

The technique used for the articles are very similar to that of the two daises, not to the built-in dais settled at center. Therefore the author concludes that the articles were made around 1160 at the same time as the manufacture of the daises.